263
59

×
複写

際實論理

修身教授法要義

佐藤熊治郎監修
三浦喜雄著

東京
寶文館藏版

始

廣島高等師範學校教授
兼附屬小學校主事 佐藤熊治郎監修
廣島高等師範
學校訓導兼教諭 三浦喜雄著

理論實際 修身教授法要義

東京 寶文館藏版

大正
13. 6. 6
内交

263.5-59

序

この小著は西哲學の忠實な信奉者の一人である著者が、小學校の修身教授について苦しみつゝ考へて來た收穫を簡潔な平明な形にして纒めたものです。然し書き終つて見ますとどうやら知つてゐることを皆書いてしまつたやうな氣がします。

著者は教育界に入つてからもう二十年にも餘りますが、其の間何時とはなしに興味を持ち出したのは修身と國語です。而して修身は其の教授を如何にすべきかといふ事には常に迷つては苦しんでゐました。此の惱みは今でも解決したとは思つてゐません。從つて斯の書は苦しみつゝ考へ行く學徒の一記錄です。理論と實際前編と後編とは其の趣旨に於て相背反してならないといふのは著者の信條です。

著者は斯點には十分注意したつもりで從つてこれを本書の一の誇としたいと思ひます。

大正十二年六月　廣島に於て　著者

印刷の工が進みもう出版するといふ時憐なる本書は大震災の見舞ふ所となつて全部を灰燼にしてしまひました。而して著者もその十一月御影に任が移りました。私情ではありますが著者は本書を震災と轉任の記念ともしたいと思ひます。

目次

第一編　序論……一

第一章　道德教育といふこと……一

教育……一

道德教育……三

教育と道德教育……五

道德……六

第二章　修身教授といふこと……一三

模範……一三

訓練……一五

修身教授……一六

第三章　修身教授と教師の態度……二四
權威的態度……二四
獨斷的壓迫態度……三一
窮理的態度……三三
反省的態度……三七
懺悔的態度……四一
第二編　修身教授の各方面……四四
第一章　修身教授其の物……四四
第二章　例話の研究……四八
第一節　例話について……四八
第二節　新作童話と其分類……五一

第三節　假話をどう考たらよいか……五六
第四節　假話の教授法へ……六四
具體化する事　藝術的方面
第五節　實話の考へ方……七八
第六節　實話の價値……八一
第七節　實話を話すに當つて……九二
第三章　訓話の研究……一〇三
第一節　訓話の分類……一〇四
訓話其の物の性質から見た分類
第二節　例話と訓話の結びつけ方……一一三
例話から訓話へ　訓話と例話と訓話と　例話中の小判斷
第三節　義務の目に關する訓話の教授法……一四〇

法律的教授　自學的教授　討論式教授　想像經驗
第四節　德的訓話の教授法……一五五
行ふ或物の發見を指導する方法　自然の至情
第五節　行爲の經路を直觀する訓話……一六八
第六節　理想……一七八
第四章　格言……一九二
第一節　格言と其の種類……一九二
格言の價値　嘉言と俚諺　客觀的と主觀的と
第二節　格言の教授法……二〇五
境を作つた投入れる法　投與へて考へさせる方法
解釋と意味と　格言の成長
第五章　作法……二一六
第一節　作法とは如何なるものか……二一六
第二節　作法の教授について……二二一
第三編　後編……二二六
第一章　教科書について……二二六
第二章　教案の立て方……二三五

——をはり——

理論
實際

修身教授法要義

三浦喜雄著

第一編　序論

第一章　道德教育といふこと

教育

私共は學校でする仕事は、如何にも讀本や算術を兒童に敎へる即ち知識の敎授をして居るやうでありますが、然し私共は決して唯知識を與へてばかり居るのではありません。其の間又知識を與へると共に

兒童に姿勢を正して學ばせるとか、本と眼の距離を適當にして學ばせるとか、机や腰掛の高さを兒童の身長に應じるやうにさせるとか或は積極的に種々な運動をさせるとかして身體の教育を行つてゐるのですし、本を整頓させる、室を清潔にする、或は美的に裝飾する、詩や音樂や圖畫などを課する事によつて美の教育を行つてゐます。それと同時に自分があいても忍耐して學ぶとか、算術などで見ても正しい事を愛するとか、他人がしくじりをしたとて嘲笑したりしない等の習慣を與へたりする等の事で、道德の教育を行つてゐます。即ち一口にいふと私共は常に教育をしてゐるのであります。具體的な教育の進行は決して知の教育のみをしてゐる、情意の教育をしてゐるとはつきり分ける事が出來るものでありません。一時間の時間に讀み方教授をしてゐるといふのも主として讀み方を教へてゐるといふ事で、私共はいつでもそれと共にそれと同時に道德の教育美の教育、を行つてゐるのです。從つて何々教授法といふのはこの具體的な教育の働きから知識の教授の方面だけを抽象して其の方法を論じたものなのです。

道德教育

道德教育といふのはこの具體的な教育作用の一つの方面で、具體的な教育の働きを道德といふ觀念の下に限定整理したものです。故に道德教育の事を論じようとするには先づ道德といふ事を明かにしなければなりません。道德といふ事は中々むづかしい事で諸種の說のある事ですが、私は各人の生活經驗にあるごくごく平易な所から出發して說明しませう。私共が世に立つて行くには先づ何人にもあゝせねばならぬ、かうせねばならぬといふ道があります。例へば本を習つてゐる時には他見をしてはならないとか、貴人の前では無作法な事を

してはならないとかいふ規則です。これを道とも義務ともいひます
それから各人には學才があるとか、やさしくて人をよく愛するとか、勇
氣があるとか、親子間の愛情とかといふやうな能力又は力があります
これが自然の性情でありますが、正しく働かなければいけません。其
の正しく働く有樣を德といひ、これは種々に行つて習慣となつて身に
得て來るのであります。更に人には何か欲しいといふ欲望があります。欲する所は充さうとしてゐるのでありますが、これも必ず充すべき欲望と充すべからざるものとあります。この充たすべきといふ事を當爲といひますが、欲望の滿足が、當爲に合した時之を善といふのであります。つまり道といふのは外にあるきまり即ち義務德といふのは自分の力の中正であること。善といふのは欲望が當爲と合した有樣をいふので、此の三者を合せて道德といふのです。從つて道德教育といふのは兒童の欲望と能力とが中正を得、義務に合するやうに指導する教育作用を指していふことです。

教育と道德教育

道德教育は教育の最も根本的なもので、其の第一に置かるべきもので、知の教育は其の次に來るべきものです。この事は多くの教育學者がいつてゐる所ですが、殊に我が國では西博士、ドイツではバウルゼンといふ人がいつてゐる所です。バウルゼンは人の最後の價値は其の最も深い本質である所の、意志、正しい意志の狀態の中に存する。品性の陶冶のない知性といふものは危險であるといつてゐます。本當に正しい道德的品性によつて支配されてない所の知識や能力や欲求はよくもなれば惡くもなります。愛情といふやうな事も正しい意志によつて制しなければ或一人の子供のみを愛して他の數十の子供の上

に平等に及ぼすといふ事をせぬ偏愛となつたり、算數上の知識の如きも賭博とか詐欺などに使はれる事もありますし、欲求の如き例へば食慾のやうなものは強い意志によつて制御されなければ中々よい工合に行かんで、よく腹をこはしたりするものです。道德教育は教育の根本だといふのは實に人間の生活に正しい方向を與へるといふ事にあるのです。

道德

斯く考へて來ますと、道德といふものの道德教育といふものはごくごく窮屈なものと考へられます。又外の方から人をしばるもののやうに思はれます。然し決してそんなに人の心にないものを外から束縛するものではありません。道德といはれるものはごくごくの未開人にもあつたのです。部族生活をなし、酋長によつて支配されてゐる野蠻人にも一つの戒律即ちおきてがあります。例へばこの林檎は神樣を祭るに使はう。それまでは誰にもとらせまいとすると、此の林檎はタブーだといひます。すると何人もこれをもぎません、又結婚の事日常の動作の事と種々のおきてがあり、それは輿論に依り、其の部落の傳統により、酋長や傳統をよく知つてゐる長老や宗教上の事を司る人によつて支へられてゐます。斯く道德現象は如何なる民族にも如何なる未開の人類にも存するのです。

所がこの戒律には種々と不合理なものがあります。例へば神を祀るには敵族の首をとつて來て祀るとか、一人が罪を犯すと其の人の親兄弟までも罰するとかいふやうな事です。人の智が進まん間はそれでも滿足したでせうがだん〳〵理性が發達して來るともうこの外部の不合理な命令に對して疑を持つて來ます。そして自分の心で正し

いと思つた律法に從つて行動しようと考へて來て、茲に社會の傳統と戰ひます。その戰は良心に從つて行動しようとする意志が強ければ強い程深酷になります。果ては不合理の傳統の保持者たる社會が社會の爲にならぬといつて殺したり、罪したりする事があります。處が面白いもので、殺した社會の孫の時代位になると、極つて殺した人の爲に記念碑を立てるものです。今の修身教科書に收められてある人では渡邊崋山がそれです。ソクラテスがそれです。

斯く申しますと外なる社會・傳統と、內なる良心とはまるきり反對なものである相衝突するものである。從つて自分の良心の道に從ふ事になると道德はまるきりひつくりかへると考へるでせうが、決してさうではありません。人の良心的活動と社會の道德とは相一致するものです。各人が社會に立つて良心的に行動し、すべてが一致し又相一致すべしと要求し、それが一般にあてはまつた、時道德律即ち道德上のきまりとなつて社會に保存される事となつたのです。そして習慣となつて維持され、背いたものに對しては社會的非難となつて維持して行き、其の中のこれは是非强行しなければならないと言ふものは法律となり刑罰を以て强行される事となつたのです。故に社會の道德律といふのは各人の良心の產物なのです。然しそれが固定して來ますと進步がありませんので、古くなりますし、新しい律法も入ります。又種々な風習の間には不合理的なものさへあります。一寸申しても日本食のみの時代の作法や風習と、洋食の作法風習には異ひがあります。コーヒーが出來れば其の出し方や飲み方、飲む分量についても新しい作法と道德內容が入るわけです。封建時代と立憲政治時代とでは私共の政治生活上の道德に大變な相異があります。これを昔に返さう

とするのは丁度汽車の軌道の上を駕籠で行かうといふやうなものです。時代錯誤です。其處を不合理の點を合理化して行かう。新しい時代には進歩した道德を作つて行かうと言ふのが道德上の偉人の鬪です。丁度長く着てゐた爲に着物は大分垢づいた。この垢をおとしてやらう。丈が高くなつたがまだ着物は長くならぬ。一つ新しい着物を作つてやらうといふのです。決して着物の代りに履物を着せようとか、帽子をはいて下駄をかぶらうとかするのではありません。故に多くの場合に於ては斯る偉人は其の苦悶の結果社會の傳統をば新しい意味に於て生かして行かうとするか、又は其の不合理の點を合理化して行かうとするのです。決して相反對するものではありません。

斯く道德は各人の欲情、能力、社會の風習の中にあつて、これを合理化しようとするものですから、如何にも窮屈で不自由なものの樣ですが決して窮屈な又不自由なものではありません。欲する所を當爲と一致せしめ、なす所活動を中正ならしめる事は慥に困難な事です、大なる努力が入ります。然し其の到る所は決して窮屈なものではありません。不自由なものでありません。實に自由な世界です。一時の欲情に驅られて無暗に酒を飲んだ人を考へて御覽なさい。歡樂の後には大なる不足と空虛があります。一時の激情に驅られて人と爭うた後を考へて見なさい其の後は決して快いものでありません。勝利者には勝利者としての大なる悲哀があります。然し其の欲望を當爲に合せしめ、激情を抑制した後を考へてごらんなさい。大きい滿足があります。愉悅があります。充實と不足との對立、歡喜と悲哀とは相對立したものです。所が道德の實行にはこの對立を超越した永久の滿足があります。無論この境は中々私共凡人の到り得ぬ所で、私共には欲

を抑へては少しづゝ自分をよくする永久の連鎖があるのみです。然しかうなつた所は考へる事は出來ます。其の考へた所はどうせでう大なる努力を要せずして其の行動が人道に叶つた境地を想像して見ませう。本當に自由な境地ではありませんでせうか。大聖孔子は歳七十にして心の欲する所に隨つて矩を踰えずといつて始めて此の境に到達しました。

西晉一郎　倫理哲學講話(青英書院)普通への復歸と報謝の生活(日本社)道德教育について(學校教育論文)岩波書店哲學辭典、

西田幾多郎　善の研究(岩波書店)行爲的主觀、美と善(哲學研究論文)

猛田萬一郎譯　倫理學(デユウエー、タフツ原著博文館)論語及び孟子(朱註による)

Paulsen　Pädagogik

第二章　修身教授といふこと

道德といふ事及び道德教育といふ事は前節で說きました。然らば道德教育の手段としてはどんなものがあるかと申しますと、パウルゼンはこれを模範訓練・教訓の三に分けてゐます。

模範

總ての教育は其處に歸着しますが、殊に道德教育に於ては其の中心となるのは教師の人格的感化です。優れた教師が受持つ時其の教師は一言も言はなくても兒童をして優れたものたらしめる或力が存します。夫れ丈劣惡な教師の劣惡な感化も亦惧るべきものがあります。持上りの續く學級では其の兒童は先生の特性をそつくり受けてゐる。兒童は教師の精神上の子だとはよく人のいふ所です。或校長は朝會

でも一言一行も苟くしない人であつた。然るに次に來た校長は多辯でした。前の校長の時には朝會は嚴肅の間に行はれるのが常でしたが、後の校長になると喧騒裏に終始されるやうになつたことを聞いた事があります。何の爲でせう。夫れは物言はぬ辭が人の心の奥を動かすのです。暗示といふのはこの事です。一日少くも四時間か六時間子供の前にさらされてゐる私共の人格は、いくら隱したつて隱しきれん眞實を子供の眼の前に出します。其の人格の流が暗示になつて兒童の心の流に影響するのです、故の私共は子供の前に自己を慎れなければなりません。以上は模範の第一の要素たる人格的暗示の方といつたのですが更に私共は其の第二の方面として社會的暗示を考へなければなりません。消費節約の聲が何處からか起つて來た。そして人心が引締つて來たといひますが、その感化は社會的暗示となつた時、本當に有効です。政府がやつたとか、誰々が自分の功名を立てんが爲にやつたといふでなしに何處からか來た樣になつた時始めて有効です。故に教師も子供の爲に一組の兒童、一校の兒童の爲に其の級其の校によい風が行はれるやうにしなければなりません。更に青年團處女會戸主會等によりよい風俗が鄕黨に行はれるやうにしなければなりません。學校教育者が進んで社會教育に盡さなければならぬ理由は此處にあるのです。然しそれは己がやつたといふ功名心からするでなく、誰とも分らんやうにして善き風が行はれるやうにするがよいのです。

訓練

訓練とは子供に仕事を通して直接に意志を練習させ、以てよい品性を作つて行かうとするものです。私共は授業の終始に於ける禮、教室

の出入の動作、掃除、下駄や草履の入れ方等種々の場合に於て兒童の動作をば練習によつて導く事が出來ます。これによつて得た習慣がやがて品性と名づけられるやうになるのです。此の部分も詳細に述べたいですが、後の機會に讓らうと思ひます。私共は普通模範と訓練とを合せて廣義の訓育又は訓練と申します。

修身教授

修身教授は道德教育の手段として第三の位地を占めてゐます。即ち教訓といふのがこれに當るのです。人格的感化は心の奥と奥との交渉から被教育者の人格を道德的ならしめようとし、訓練は意志の直接練習によつて品性を築き上げよう、手や足や目の練習から道德教育を行はうとするのでありますが、教訓は口を以て文章を以て人格の内部に入り込み以て其の人格を動かさうとするのです。故に畢竟する所は意志を陶冶しようとするのですが、どうしても間接に陶冶する事になります。直接にする事にはなりません。故に道德教育上どうしても第三番目に來る事になるのです。

所でそんな道德上の教訓は隨時に常にやつてゐるから、別に毎週二時間も時間を特設して修身教授をする必要がないといふ人があります。これも一の眞理でありますが、私共が間接的に口や文章から心の奥に入らうとするにはどうしても道德的人物の例話を語るか、或は反道德的人物の例話を語つて成程ねーと情の側から動かして行かなければなりません。かういふやうな話を聞く事は生活上の便益不便益といふ實用的價値を離れて人生生活上の必須事です。心の食物であります。又道德に關する事は學として立派に組織された知識でありますし、又これについては古來多くの人が教へてくれました。斯の道

德に關する知を得古人の教說を知る事も亦其の人を高く美しくする所以のものです。これに親しむ事も亦生活上の便益金錢の損得以上に人其の物として必要な事です。否これによつて私共は生活の指導原理を得るのであります。更に道德上の事は人の欲求能力といふやうに其の人の心の動き方に關係してゐます。自分の精神の動き方、欲求がよく其の常軌を逸して行く所を顧みたり活動が中正を得る所や邪惡に走る所を顧る事が人生上如何に必要な事でありませう。又如何に尊い事でありませう。然るにこのやうな事の爲には私共はしんみりとした時間が入ります。五分や三分の短時間では到底達する事が出來ません。私共が特設したいといふのは實にこの理由によるのです。現代は餘りに字が書ければよい、算術がうまければよい、といふやうな主知主義の教育に傾き過ぎてゐます。私共は修身とか唱歌とか圖畫とか手工とかいふやうな生活上の用を離れた人格にうるほひをつける教科にもつと力を注ぎたいと思ひます。中學校以上の學校はまるきり駄目です。せめて小學校ではこんな教科に力を入れたいものです。

所で此處に道德教育といふものは修身が其の全部を受持つものである。修身をさへ教へて居れば子供はよくなつと行くと考へてゐる人があります。これを修身教授萬能論と申しませう。こんな考は本當にさう思つてゐる人もありますが、他には方便に例へば役向の人人の如く教育者に對する責道具として用ひる事もあります。この論をつきつめて行きますと德は知なりといふ事になりますが、德は知が其の全部でありません。主要部でもありません。主要部は行です。意志の習慣です。知つたら行ふと考へるゐる人をバルトといふ人はア

ムピオンといふ神樣の譬をとつて笑つてゐます。アムピオンといふのは希臘神話中の英雄神ですが、この神樣は不思議な力を備へられて、石よ集合せよといへば何處からともなく多くの石が集つて來、石垣作れと言へば一しよになつて石垣を作つたといはれてゐますが、言つたら行ふと思ふのは丁度教師にアムピオンのやうな力があると思つてゐるのです。人には其の資質に敏不敏があります。能不能があります。中々さう教へたからおいそれと行ふものではありません。教訓は飽迄も道德教育上第三番目に來ます。模範・訓練が主要な手段として他にあります。(勿論もつと深い知行合一論はちがひます。)

所で他には今度は見當違ひに修身なんどをやつたつて道德教育上何等の効果がない。やめるがよいといふ人があります。この論には道德の事は行である、知でない。故に知を主とする修身はやめようといふ行中心から來た考もありますし、生活上の役に立つ算術とか讀み方とかをやつた方がよいといふ實用主義的な考から來たのであります。これに對する答は前に申しました。成程修身教授はそんな効果のあるものでありません。道德教育上の手段として第三番目に來るものです。然し無効果であるとは決して申されません。無知が如何に不道德を生むかを考へて見ませう。前章に述べた蕃人の首狩はどうです。ダーウインが南米の方へ旅した時、或蕃人夫婦が海邊に仕事をしてゐます。其處へ其の人の子供が來ますが、何か氣に入らん事をしたでせう。すぐ首をひねつて海に投げて殺してしまひました。然し其の後は今この大慘虐事をなしたといふ事も知らぬ顔に平然と手つきも變らずに仕事をしたといふ事があります。教へざる民の不道德です。私共は教へるといふ事の効果も認めたいものです。況んや

効果の有無以上に道德的人物の傳を知るといふ事が人生上必要な事であるといふ理があるに於てをやです。全體余りに効果を大きく見過ぎますと失望も大きくて廢止せよのなんと申します。余りに効果を大きく見過ぎない事です。價値を正視する事です。所がも一つ道德を頭から厭つて修身教授をいやがる人があります。かういふ人は恐らく小說でも讀んだり、ヴアイオリンでも彈いたりして自由戀愛でもやらうとする人で、これに對する束縛が厭なのでせう。危險です。然しかういふ人は人生は嚴肅である事を考へて貰ひたいものです。歡樂の後に來る哀愁を考へたいものです。それが將來する人類の絕滅といふ事も考へたいものです。ローマは何故滅んだのですか。音樂でもやつて居れば修身なんかやらんでもよいといふのでせう。然し大音樂家の名に跪く人が何故に大思想家に跪かないで反抗するのでせう。修身の教は大思想家の教訓したものです。道德的人物の傳紀です。其の大思想家、道德的人物、大藝術家、大英雄に跪くを教へるのが修身です。夫れを嘲笑するといふのは余りに僭越です、不遜です偏狹です。私共はこんな思想には惑はされないやうにせねばなりません。

由來東洋では道德に關する學問があらゆる學問の中心でした。修身の學は古に於ては非常に尊ばれたと思ひます。コーエンといふ人も其の純粹意志の倫理學といふ書で、倫理學は人間其の物を對象としてゐる。故に全哲學の中心に立つてゐるといつてゐます。修身の取扱ふ所も實に具體的な活きた私共の精神です。故に學校教科の中でたつた一つの哲學的教科で、他のあらゆる教科をして其の向ふべき所に向はしむる各教科の中心となる科です。私共は其のつもりで修身

科を扱つて行きたいと思ひます。

Darth. Eremente der Eyiehnng und unterrichslehre.
Paulsen Padagogik Erzlehmu-g
Golsen Eilik des reinen willens.
丘博士　進化論講話、（開成館）
四博士　道德教育の本質（學樣教育論）

第三章　修身教授と教師の態度

權威的態度

以上で以つて修身教授の本領を述べました。私はこれから修身の教授者の態度を述べなければなりません。これを考へる時私共は先づ權威あるものとして一段上の人として教說する態度を考へなければなりません。これを權威的態度と申しませう。古聖を以てすれば釋迦の如きば夫れでありました。彼が無上正覺を得、一切勝者一切知者と宣して菩提樹下を出で、バーラーナシーの城外鹿野苑に至つた時先に苦行を共にした五人の修行者に會ひました。この五人修業者は先に釋迦が苦行を棄てて樹下に坐つた所を見、「彼は墮落した。安逸を求めた。」といつて捨て、これからは顏を見ても物をいふまいと誓つたのでした。而も此處に會ふや其の威容は五人の比丘を動しました。席を設けて語りましたが、彼等は未だ釋迦が絕大なる內證自覺を得た事を知りませんので、其の姓名を呼び友達扱をしました。之に對し釋迦は嚴然として「我は如來である。即ち世界の實在のさながらの相に通じ、一切衆生にも之に通せんが爲に其の法を世に宣布せんが爲に來たものである。故に姓名を以て呼ぶ者以上のものであるぞ。友達扱

をしてはならぬぞ。」と宣せられました。而も其の人格的威力に打たれた五人の比丘はだゞ喝仰讃歎してこれに隨從したのであります。我が一切の衆生よりも一段高いものであるぞといふ態度を以て衆弟子を導き、衆弟子は唯々これを仰いで從つたのです。然かし釋迦の衆弟子に對する態度は實に暖かなものでした。弟子の非行のあつた場合の如き、勿論譴責するといふ意味は其の中に含ませたのですが、正面から攻擊する事なく、徐に教誨說諭したのでした。豈弟子に對してのみではありません。反對者たる外道に對しても先づ其の所說を述べしめて之を容れ、内からひつくらかへすやうにしたのでした。

キリストに於ても之を見る事が出來ます。ガラリヤの地を遍歷し、多數の群集の集り來るや、山上に立ち、「幸福なるかな、心の貧しき者。天國はその人のものなり。」といひ、其の說法を聞きて行ふ者をば磐の上に家を建てたる如き慧き人だと斷じ去つた時多勢の群衆は驚いたのでした。實に學者等のやうでなくて、權威あるものの如く教へられたからなのでした。

修身教授の教師にもかういふ態度を見ます。其の教授に於けるや熱があります。力があります。然し夫れは要するに余は汝等よりも一段高き所にあるものぞ。余の導きに隨へといふ態度です。これは教師の人格が非常に大きい時大いに効果がありませうし、又子供が幼い時で何でも教師は世界で一番えらい者と思つた時にはそれで何等の問題も疑問に起しますまい。然し教師としての私共は又一面に於て非常に弱いもの未熟なものである事を考へたいと思ひます。兒童の前に曝してゐる教師の人格と行爲と習癖の觀察には兒童は中々敏感で又これから多くの問題を彼等が其の胸に持つ事を考へなければ

なりません。整頓の美德を說きます。然し恥しながら私はこの德を身に備へません。それを押切りて整頓せよといふ時兒童は先生はと疑問を持つて來ます。又整頓好きな敎師が私はよく物を整頓してゐる、斯んなにしてゐると活す時それは自慢と聞えて、すぐ他の弱點を思ひ浮べては小さい反感を其の胸に持ちます。其の時私共の敎訓は豆腐に釘です。敎師も人間です。兒童も人間です。反對暗示に捉れ易い人間です。人間が人間を導く修身の敎訓です。或校長が修身の敎訓を垂れます。一二年の頃は「本當にさうだ」と考へたものでしたが、三年頃から「あゝいつてゐるが校長の日常の行には中々反したことがある。」と思つて反感が先に立つので其の敎はさつぱり耳に入らんと言つた中學生の話を私は聞いた事があります。

勿論これが不世出の道德的大偉人か又は誰が見ても當代第一の學者といはれるやうな人ならそれでも何人も承服しませう。例へば孔子の如き其の御弟子の顏淵は喟然として「之を仰げば彌高く、之を鑽れば彌堅し。之を瞻るに前にあるかとすれば忽焉として後に在り。夫子循循然として善く人を誘む。我を博むるに文を以て我を約するに禮を以てす。」と歎じて更に「罷めんと欲して能はず。」といつてもう精根が盡き相なからやめようとするが、孔子さんの敎育法がよいので中々止められない。「既に吾が才を竭す。立つ所あり。卓爾たるが如し之に從はんと欲すと雖も由なきのみ。」即ち一生懸命やつたので大分自信がついた。もう先生に追ひつくだらうと思ふが、何の事夫子は更に前に進んでこいこいと手招ぎして居られるといつてゐます。こんな常に進んで已まず、其の人格の大、其の學識の博衆弟子は梯子を掛けても及ばないといふ樣であればそれは權威あるものとして先に立

つて導いても人も承知します。所で私共は如何でせう、果して權威あるものの如く言ふ權利がありませうか。言つた事は行つてゐると公言し得る自信がありませうか。少くとも私にはありません。故に私には權威的態度は出來ません。

勿論人倫上の變事。例へば大火事大風等の如き事のあつた場合私共は兒童の前に泰然として居なければなりません。孔子樣が衞の國から宋の國へ入られようとなすつた時でした郊外の大樹の下で門人に禮を敎へて居られますと、宋の將桓魋（クワンタイ）といふものが、兵士を會し其の樹を倒して孔子を殺さうとしました。門人は皆あわてて早くお逃げなさいといひますと、毅然たる態度を以て孔子は「天德を予に生ぜり。桓魋其れ予を如何。」といはれて平然としてゐました。人格的偉力つて恐しいものです。さしもの桓魋もとう〳〵何ともしなかつたと申します。此の自信があつて狼狽する兒童をして嚮ふ所を知らせなければならぬ事が度々あります。又道に對する尊敬が厚い時矢張りさうします。例へば忠を盡さなければならないと說く時、私共は力强く言ひ切ります。道に對する尊敬が厚いからです。道に對する尊敬の心がこれを言はせたのです。然しそれも決して頭から押かぶせるやうな獨斷や警察的な態度からではありません。之を各自の心から察し、兒童にも敎師にも動かすべからざる信念の生じた時、其の後に斷乎として言ひ切るのです。其の言ひ切るまでに至る過程には決して獨斷的な態度には出ません。兒童の前に立つた自已の影の醜さを知る時、決して私はそんな態度には出れません。

獨斷的壓迫態度

權威的態度に似、夫れにも增して排斥すべきは獨斷的壓迫的態度で

あります。よく君には忠親には孝、兄弟は仲よく、夫婦互に和し合つて行かなければならぬぞ。でないと忠良の臣民にはなれぬぞと聲を勵まし卓をたゝいて兒童に向ふ人があります。內容の空疎な概念的なそして之を飾るに聲と身振りとを以てした獨斷的な壓迫的な態度です。こんな事では兒童は何が何やら分りません。又如何して行つたらよいか何も分りません。知能の程度の低い人、田舍の子でもあるなら、それでもまあをとなしくなつてゐませう。知能の普通な人以上のものはもうそれで滿足は出來ません。必ずどうしてですかと反問して來るに決つてゐます。所が先生にはこのどうしてですかといふ問は大禁物です。大禁物を外に向つて飾るには如何にしてなどと考へるのは修身を知識としたのだ。修身は知識の敎授でないと申します。そしてそんな事を問うて來るものは實に危險思想の卵だと申します。

で多くの子供は向ひたい心をぐつと抑へて御無理御尤もとしてゐます。敎室は壓迫されたやうな重苦しい樣な見るからいやなものになつてしまいます。兒童には最も自由なるべき修身の時間が最も不自由ないやな時間になつてしまひます。修身敎授の暴君政治です。デモクラシーでありません。こんな態度で修身は知識でないと揚言する人に私はでは修身は獨斷ですか、獨斷を壓制的に押賣するのが其の所謂情に訴へる所以のものですか。修身には知識の部分は全然ありませんかと反問して見たいと思ひます。

窮理的態度

修身には知識の方面もあるといふ所から、此處に第三　窮理的態度が生れます。孝を說くにしても孝とは何んな行か。何故孝は行はなければならないか。其の孝の行の目はどんなものかと研究して行き

說いて行くのがそれです。多くの人はこれは知識の方法である。修身科の進むべき正しい方法でないと排斥しますが、私はさうは思ひません。少くとも教師にはこの學的方面に於て豊富な知識と十分な自信が必要であると思ひます。私は此の點から見て實にあぶなつかしくて見て居られん教授や、自分の小さい獨斷の多い一時の感情を誇張して言つたやうな感傷的な教授が多くて、本當に識見から生れた教授が甚だ少いではあるまいかと思ひます。識見の十分な深い自信から生れた教授には本當の力があります。殊に十分の力を備へた人が其の二三分四五分位の事を話して行く態度を考へて下さい。一杯に流れる汪洋とした春の川を思はせるものがないでせうか。現代に活きる私共の修養書たるカントの倫理學、藤原正先生によつて譯された道德哲學論を讀みなさい。

この世界に於ては何處にも、否廣く此の世界の外に於ても、唯善意志の外には無限局に善と見做され得る樣なものは考へられない。と、書き出して行つた、あの理路整然たる體系は誠に乾燥なものである。何等の力もないものであると言切つてしまふ事が出來ませうか。宮本和吉氏によつて譯された實踐理性批判を讀む時、この飽迄緻密な論理を一歩も忽せにしないで進んだ其の體系の背後に私共は大きい力のある事を識得せざるを得ません。更に彼の幾何學の體裁に倣ひ定理證明、系といふやうに組織したスピノーザのエチカを讀んで見ます。矢張り其の整然たる學的組織の背後に根底にこれを形つた偉大な人格的熱の惻々として迫る或物あるを感ぜずには居られません。否このやうに西洋の哲學書を擧げるのみでありません。諸君我が西晋一郎先生の普遍への復歸と報謝の生活の中にある孝の說を讀んで見な

さい。一歩も忽せにせぬ論理の裏ににじみ出てゐる尊い人格のあふれて來る所を私はしんみりと考へて見たいと思ひます。同博士の倫理哲學講話を讀みませう。私共は思索の力に肅然たらざるを得ません。眞と善法と道德の關係行爲的主觀を說かれる西田博士の說にも學に依る力を私は見ます。紀平博士の行の哲學といふやうに私共は學的態度が動かす多くのものを見ます。更にかく整うた理論的敎說には整うたに伴ふ美しさがあります。例へば高等小學讀本卷四にある鳳凰堂の美しさがそれです。嚴格な左右均齊の釣合のとれた均齊に伴ふ美しさです。又卷三の京都博物館の繪を見るやうな整うた形から來る美しさです。其の美しさが力となつて私共の胸に迫る所を考へて見ませう。

さればとて私共は決して尋常一年の子供から理窟を敎へよといふ物でありません。否小學校に於ては高等科でも決してこんな學問的理論を說いてはいけません。唯それがいけんといつて敎師が學的修養が入らんと排するのを憂へるのです。理窟を說かんといふ事と學的修養をせんといふ事とは全然別物です。四澤の水が融けて川一杯に洋々と流れて來る春の水を理想とするのです。靜かに流れつつあらゆる物を押流さんとする春水を考へるのです。五分の知惠を十分に使つてすぐ化けの皮のはげるやうな又見てゐてハラ〳〵するやうな授業に陷らないやうにする爲、まづ常に學的修養を怠らない態度を考へて見たいのです。其の態度が授業となつて現はれた時奈何してそれが力を備へずに居りませう。私は講學的態度を讃美します。

反省的態度

然し學は飽迄も組織したものでありますし、又それが學問である限

り知の世界のものです。所が其の奥に、其の根底に學を組織するものがあります。その力が即ち意志です。行です。殊に道德に於ては全く純粹な行の世界です。此の世界に入りますと心から心に働く仕方しかありません。前に道德教育の方法として述べた第一の方法たる人格的感化を以てする模範の世界の事です。所で私は修身の時間ではこの人格的感化をもつと意識の世界に現はしたいと思ひます。子供と接してゐる間に無言の裏に行はれるのは暗示を以てする無意識的な感化ですが、修身の時間にはこれを言語を通じて意識の境に持來つて行ひたいと思ひます。然らばさうした時の態度はどうしたものであるかと申しますと、それを私は反省的態度と申したいと思ひます。

此の態度を以て臨む時、私共は著しく謙虛になります。自分の裏にひそむ醜い影にわな〳〵とふるへます。同情を說きます。他人の悲哀を見る時自分の心に同情が起る。これを擴充しなければならぬと說きますか說くと共に、敎へる自分の心には兎角他人の失敗を喜ぶ惡意的歡喜の起る事を考へては其の醜さにあゝと歎息します。然し突つめて醜さを觀た時、觀ると共にすぐこれではいけない。正しい道に進まうといふ心が起ります。そして君等の胸にあるやうな人情の弱點は僕にも多分にある。人間らしい人間共通の醜さであらう。然し僕はこれではいけぬ。進まうと思ふ。醜い影を持つてゐる點に於ては君も僕も同樣だ。さあ然し共に進んで少しでも醜さを除かうではないかといふ態度になります。其の時私は進まうとする形を明瞭に子供の前に提出します。

孝を說きます。其の時胸に浮ぶのは如何に自分は孝を盡さんとして而も足らないがの心であります。足らなかつたといふ悔の一念に

苦しめられつゝ恐らく君等もさうであらうとして臨んで行きます。而も父母に對し　愛敬と愛情とがみち〳〵て存する。この心も亦君等も僕も共有のものであらうとして進んで行きます。斯の態度で臨んだ時、私共には已は教師、先達、汝等は後進といふ老は出て來ません。教師も兒童も共に共に道に進む人となつて現はれて來ます。私はかうした人として此處に愚禿親鸞を發見しました。否吉田校長から教へられました。親鸞聖人は其の歎異鈔に於ていつて居られます。

親鸞は弟子一人もたずさふらふ。その故は、わがはからひにて、ひと念佛をまうさせさふらはゞこそ、弟子にもさうらはめ。ひとへに彌陀の御もよほしにあづかりて、念佛まうしさふらふひとを、わが弟子とまうすこと、きはめたる荒凉のことなり。

何といふ謙虚な辭でせう。眞宗の信者でない私は、道の書として、例へば四書を讀むやうな聖書を讀むやうな、又アウレリヤス帝の瞑想錄を讀むやうな氣分でこの書を讀みましたが、其の時はたと胸に響いたのは此の句でした。一重に彌陀の御催にあづかつて念佛を申す人は此聖人の同行者なのです。同朋なのです。決して師であり、先達であり、弟子であり、後輩である譯ではないのです。私はこの氣分を以て子供に臨んで見たいと思ひます。

懺悔的態度

何だか私自身の事とごつちやにして申したやうに思はれますが、意味は通つた事と思ひます。勿論私は兒童の前に自己の惡しきを大膽に告白する懺悔的態度には出來ません。一々の行爲に於て兒童の知らぬ複雜な惡行のある境を兒童の前に提出して、其の幼き良心を脅かす事を欲しないからです。動かんとする心こそ共通ですが、一一の行

爲は中々兒童と教師には大きい相違があります。複雜さと深刻さがあります。それをまだうら若き愛する兒童の前に提出して、其の良心を脅かし、知らぬ惡行を敎へる事彼の二三の青年者流の行動には出でたくないからです。唯心の中に醜さを感じ其の外界に現はれる行爲の端々について共に考へたらよいと思ひます。

以上權威的態度、獨斷的態度、窮理的態度、反省的態度懺悔的態度、と擧げて來ましたが、この順序はやがて子供の發達に應じた敎師の態度にもなります。幼い子、尋常一二乃至三年位の子供は權威的態度に出てよろしうございます。此の時代の子供は本當によく敎師を信用して呉れます。私共のやうな拙いものでも大學者、大聖人のやうに思つてくれます。親がどういつても聞かなかつたのが、先生がいうちやつたよ。(廣島方言でいはれましたよの意)で翌朝から齒を磨くやうな時代です。敎師の權威的態度に向つて少しも批判の子懷疑の子とならぬ時代です。權威的な態度に出てよろしうございます。獨斷的態度に出てもよろしうございます。窮理的に出で反省的になつて臨まなければならないのは漠然とした私の考ですが、六年頃からだと思ひます。そこで權威的態度から反省的態度に移る移目が大切になつて來ます。然しそこは斯くするとは私は何とも申されません。此處こそ口以ていふべからざる言舌を立つべからざる藝術の境だと思ひます。漸次に理知的要素を加へて行くといふのは巧妙な說き方ですが、毎日の實際には殆んど役に立たない辭です。如何に移るかといふ所には矢張り何ともいへん境があると思ひます。

第二編　修身教授の各方面

第一章　修身教授其の物

普通修身教材を分けて例話、訓辭、格言作法として論じてゐますが、私は之は教授する材料ではなして、「教授其の物」の分け方だと考へます。例話、訓辭、格言、作法は決して材料ではありません。材料は私共が修身教科書で教へますと、其の說話要領、注意備考と書いてある所に收められてゐる所のものですし、偶發事項などで話す時についていへば、其の話さうとする所の物です。死んだ固定した文字として書かれたか、又は教師の心の中にあるものです。所がそれを教師が自分の腦の中でよく消化し、兒童に道德について反省して行く事を指導しやうとする件も實際あつたものなのです。全體假話と實話の二つに分けるのが適當であるかどうかは疑問で、餘程考へなければならぬものですが、この書は先づ普通の分け方に從つて置きませう。

所で一口に假話と申しましても尙私共は之を幾つかに分けなければなりません。其の分け方は種々ありませうが、私は多少學的に考へヴント（ドイツの大心理學者で又哲學者）といふ人が民族心理學で述べた所や、バルト（ドイツの教育學者）といふ人が教育教授要義といふ本で述べた所に從つて、

神話
童話
說話
寓話
備說（英雄傳說、宗教的傳說、民間傳說）

新作童話

に分けたいと思ひます。

神話といふのは字の示す通り日本でいつたら神代の時代に存する民族のごく若い時代に彼等の想像で出來た物語です。伊弉諾伊裝冊二神の御國生みの神話天の窟戸神話大蛇退治神話が皆それです。所が、大蛇退治神話から以下は殆んど英雄傳說と純神話との中間に立つと見てよろしうございます。童話は例へば桃太郎かち〳〵山の類です。勿論作つた人が明かでありませんし主人公の活働した時代も明かでありません。むしろ國民全體が作つたと言つた方がよいでせう。それに話の筋が呪によつて支配されてゐます、例へば桃太郎について考へて見ると、桃から子供が生れる、鬼が島で鬼を退治する、皆一種の呪の結果です。童話を特色づける最も大きなものは呪はよつて筋が支

と、兒童のがはから見れば儉約、なら儉約、孝行なら孝行について考へて行かうとすると、茲に教育といふはたらきが出來ます。其の働の中で昔の人とか假想的人物とかの話について其の境を想像して行かうとすると、夫れは其の題目即ち儉約とか孝とかの例話です、しそれについて其の行つた人はどんな心で行つたか。何故儉約せねばならぬか。これを自分の心の問題として考へて行く場合にはどんな事が考へられるかを取扱つて行くのは即ち訓話で、適切な古人の嘉言とか諺などについてしみ〴〵と考へて行かうとすると格言で身體的動作について優美にして行かうとすると作法になるのです。ですから教授其の物を分けると例話訓話、格言、作法となり、これを教科書として書いた物が即ち教材なのです。

第二章　例話の研究

第一節　例話について

私共のする修身教授は多くは例話が中心となつてゐます。少くとも半分乃至三分の一は例話を語る時間でせう。所で、其の例話は教授法上から見てどんなに分れるかと申しますと、先づ、

假話
實話

の二つに分けるのが普通であります。假話と申しますのは作り話で、其の話の主人公は實際に居つたものではないか、又は想像的の存在者か神樣かであり、其の話のやうな事實も大部分は想像で作つたものなのです。實際は之に反し人物は全く歷史上に存在したもので其の事

の筋が支配されるといふ事です。此の中我が國で發達した桃太郎の如きもの、其の他外國から渡つたものでもよく日本化されたものは之を國民童話といひます。

說話といふのは原始時代の人間が、自然物及び自然現象に向つて驚異を感じ夫れに向つて何とか解釋しようとして、想像を以て解釋した物語です。猿の尻が赤くなつた話などがそれです。寓話といふのは言つた話の中に道德的か處世上か何かの教訓なり意味なりを含んでゐる話で、彼のイソップ物語が其の好例で既に何千年にわたつて凡ての國民に愛されて話されて來ました。恐らく今後幾萬年傳誦される事でせう。兎と龜、鶴と狐。どんなに人類に向つて永遠の教訓を與へてゐる事でせう。

以上の如く擧げ來つて私共は其の事實の少しはあつたらうが、多く

を綯色された傳說を考へる事が出來ます。傳說の中には其の土地土地にあるいひつたへ即ち民間傳說の外に、辨慶、五條橋、賴光鬼退治といふやうな英雄傳說や、(一)國民神話のやうな神話的傳說と分ける事が出來ます。新作童話は名の示す如く小波さんや三重吉さんなどが作られるもので、外國物の飜譯でない自分の手で創作したものです。

(一)出雲の國の傳說で、新羅の方から國を引いて稻佐の濱につけたやうな話

以上の如く分れてゐますが、今の教科書では、假話と認むべきものは寓話の外何もとつてゐません。寓話としてはイソップから兎と龜、嘘をついた牧場の番人の子供自慢した鷄をとつてゐますが、其の外はみんな教科書の作者が作つた新作童話です。何故かうしたかといふに、神話及び神話的傳說、國民的童話傳說は國民的精神の涵養上頗る價値あるものですが、これは一つの獨立した國民的藝術といふべきもので特別に道德的教訓を含んでゐるものでありませんから、國語科で話して行つた方がよいと考へたからで、それよりは道德的教訓を其の中に含んだ作者の新作童話で、兒童の感情を道德的に純潔にしようとするのです。

林博士　歐米對照修身科新教授法　寶文館
佐々木秀一　修身教授研究　目黑書店
Wundt　Völkerpsychologie. Fünfter Band
Barth　Elemente Erziehung und unterrichtslehre.

第二節　新作童話と其の分類

前申したやうなわけで、低學年の教科書は其の教材として主に新作

童話を以てしてあります。今一寸これを表にして見ると次のやうです。

巻一　十八話

第二　時刻をまもれ　登校の途中小犬と戯れた兒童の話
第四　友だちは助けあへ　おたけおまつに傘を貸してやつた話
第五　喧嘩をするな　喧嘩した二人の子供の話
第六　元氣よくあれ　日曜に野外で遊んだ一群の兒童
第七　たべものにきをつけよ　未熟の梅の実を打落した男の子の話
第八　行儀をよくせよ　お文行儀よくした話
第九　始末をよくせよ　勇吉登校の時學用品を失つて困つた話
第十　物を粗末に扱ふな　勇吉石盤をこはした話
第十一　親の恩　お八重の入學と病氣
第十三　親のいひつけを守れ　お梅と一郎の從順であつた話
第十四　兄弟仲よくせよ　お梅と一郎か用達に出た話
第十五　家庭　お梅と一郎の家の夕飯の有樣
第十八　過をかくすな　寅吉穩を隣家に投げ詫びた話
第二十　自分の物と人の物　清吉鉛筆を拾つた話
第二十一　近所の人　病氣に罹つた母と子を近所の人が世話した話
第二十二　おもひやり　小三郎盲目の子に親切にした話
第二十三　生きものを苦しめるな　次郎と燕
第二十四　人に迷惑をかけるな　お千代庭掃除をして塵を外に棄てようとした話

巻二　十八話

第二　親類　正雄とをちをば
第三　兄弟仲よくせよ　お八重と三郎
第四　自分の事は自分でせよ　三郎お八重に登校の用意の手傳を頼んで母に戒められた話
第五　勉強せよ　怠りて零落した男と勉強して出世した人の話
第六　きまりよくせよ　お竹が時間の規律を守つた話
第八　臆病であるな　臆病物凱章を幽靈と見た話
第九　からだを丈夫にせよ　身體の鍛錬に注意した二人の兄弟

第十　友だちに親切であれ　文吉小太郎に手傳つた話
第十一　不作法なことをするな　文吉本を跨ぎ越えて母に戒められた話
第十二　人の過をゆるせ　文吉小太郎が毬を河に流したのを恕した話
第十三　わるいすゝめに從ふな　小太郎と文吉友人の誘惑に從はなかつた話
第十八　恩をわすれるな　お鵜道を教へて矣れた老人の恩を忘れなかつた話
第二十　としよりに親切であれ　おたき五郎老人の鍵が落したのを拾つて上げた話
第二十一　召使をいたはれ　女中を叱つて母に戒められた子の話
第二十二　辛抱強くあれ　女の子糸のもつれを辛抱強く解けと戒められた話
第二十三　工夫せよ　十吉種々の物を工夫した話
第二十四　規則にしたがへ　堤に登つた子に注意を與へた子の話
第二十五　人の難儀をすくへ　吉太郎丁稚が坂路で車を引上げるに困つてゐたのを助けた話

巻三　二話

第七　正直　客に反物に瑕のある事を正直に告げた丁稚の話

第九　友だち　友藏自分の功を以て信吉の罪を贖つた話

巻四　一話

第十七　迷信に陷るな

これを通覽して見ますと、大多數は其の主人公は子供で、そして其の主人公たる子供の生活の中の一寸した出來事をスケッチしたものです。つまり兒童の生活中の一事件のスケッチな解です。中には主人公が友人であつたり、又子供時から大人までの成長して行く間の傳記の一側面を書いたのもあります。二年の「勉強せよ」三年の「正直な丁稚」「友藏と信吉」は、長い間の事を書いたもので、「臆病であるな」(二年)、「迷信に陷るな」は大人です。即ち

1. 一寸した事件のスケッチ
2. 脚色の複雜なもの

の二つに分れる解です。

更にもう一つ良い子供の善い事をした話と、子供の過失又は放心の、狀態で誤謬に陷つた話があります。前者を普通積極的例話といひ、後者を消極的例語と申します。消極的例話には其の主人公に大抵名をつけてありません。二年の幸抱強くあれ、召使をいたはれ、規則にしたがへの例話の如きは夫れです。これはもし同樣の名を持つた子供が學校内にゐては一寸困るからの事でせう。然し一年の人に迷惑をかけるなのお千代の如き、本を跨いだ文吉の如き矢張り名を持つてゐるものもありますから一樣には申されません。

吉田熊次博士　教育的倫理學　弘道館

第三節　假話をどう考たらよいか

所で實際教育者。殊に若い教育者の中には、假話はどうも嘘つぽらくして教へる氣になれんといふ人がありますし、又教科書の說話要領の筋は余りに單調であれを話して行つたら五分か十分で終つてしまひ後の十何分は全く手持無沙汰に終つてしまふ。誠に始末に終へんものだといふ人があります。成る程兎が物を言つたり、龜がしやべつたりする事がありませんし、小太郎なの文吉なのと言ふ人は居たやら居らんやら分らん子供でもありますし。うそぼらしくて敎へられないといふ事も一應は尤もな事です。說話要領も今回の修正で大分詳しくはなりましたがまだ〳〵どうしてあれ丈を話したんでは本當に十分か十五分で終つてしまひます。然しこんな非難は一應は尤もな事ですが再應考へて見ますと、全く誤つた又足らない考です。私共は其處に假話の大きい特質のある事を忘れてはなりません。

成る程兎が龜に物言ふ道理もありませんし、龜と兎が競爭する道理もありません。それでも子供等がこの話を聞いて喜び、大人の私共さへ何遍聞いても厭かんのは何の爲でせうか。ケーベル氏はこの道理をば、

人には本當だ嘘だと相對させて、本當嘘と決めて眞をとる以外それよりも高い最高眞理を憧憬れる心がある。兎と龜七疋の山羊、桃太郎のやうな話を聞いて我々が面白いのは其の最高眞理に憧憬れる人の心が不知不識出て來たのである。(意味からとつたもの)

と申してゐますが、誠に尤もな事と思ひます。兎と龜、嘘をいつて狼に食はれた子供、自慢して鷲に捕られた鷄と、永久に人類の總てをうなづかせる或者が其の中に流れてゐます。其の或者が之に接する人をして永久に面白いと思はせるのです。考へさせるのです。お伽噺の面白いのは其處にあります。

修身の新作童話の面白味も價値も皆其處にあります。お梅とお竹、小太郎と文吉あんな子とあんな事をした事はそれはなかつたかも知れません。又あんな子は實在しなかつたかも知れません。其のスケッチした所もごく日常の茶飯事であります。それだけ考へて見ればあんな事は誰にもある事なのです。雨の日傘を貸してやつた。小太郎が毬を河へ流してしまつたので文吉は快くゆるしてやつたといふやうに、其の事をしたのは小太郎、文吉、お梅、お竹といふ特殊人ですが、そんな事は同じ樣に傘を貸してやつたり或は形を變へて本の頁を破られたり、鉛筆を折られたりする種々な事で常に出くはす事です。故に此の話によつて感ずる面白味はわしの所にもあんなのがあるといふ經驗を基礎にし背景に置いた面白味です。自分の所にある

或者が感ずる面白味です。此の自分の心の奥にある或者。人たるものの誰にもある事といふのは即ち最高眞理が表はれた面白味です。教授する人は、これは本當だ、嘘だ。何等の感激をも値しないといふ前に、此處を考へなければなりません。私は尋常六年にもなつた子供に、法を守れといふ話をして前にそんな話を習つたかと問答した時、あゝ、あのー、子供が堤に登らうとした時一人の子が止めた話ですと眞面目に答へるのを見た時、本當だ嘘だといつて、又子供が大きくなると、あんな話は嘘だと思ふ樣になるから假設話はいけないといふ論の、謂れのない事だといふ事をしみじみと考へたのでした。私共は新作童話は兒童の生活に存在する小さい事實のスケッチで何人にもある事實であるといふ信念で向ひたいものだと思ひます。

次に餘りに筋が單純で、十分も經てば話し盡してしまふ。說話要領は甚だ文學的でないといふ非難に就いて考へて見ませう。これも尤もです。然し其處に私共の働くべき所を殘した、編纂者の融通自在な所がある事を考へたいと思ひます。今、試みに卷二第六「さまりよくせよ」について考へて見ませう。說話要領を見ますと、

ある日曜日の朝、お竹は同級の親しき友なるお絹の家に遊びに行きたり。

とあります。成る程これを「ある日曜日の朝、お竹は同級の親しい友だちのお絹の家へ遊びに行きました。」と文語の口語譯を行ひましたならば本當に全體が物の十分と經たん中に飛んで行つてしまふ事でせう。然し其處です。私共が自分自身藝術家にならなければならないのは。——五月の日曜でせう。長閑な春風がそよ〳〵と外の若葉を吹いて氣持のよい朝です。お竹は何時もの通り早く起きて、佛壇に水を

備へて、お母さんと一緒に拜んで、お母さんに髪を結つて頂いて、朝飯を食べました。それから暫時勉强して、すんで一寸毬を持ちましたが、不圖お絹さんの家へ遊びに行かうか知らと思ふ氣になりました。お絹さんはお竹と同じく二年生で大の仲好しのお友だちです。で、「お母さんお絹さんのおうちへ遊びに行つてもいいんですか」と尋ねると「えゝ行つていらつしやい。」といはれたので、「では行つて參ります。」といつて外へ出ました。いそいそと出て行きました。お絹さんのうちは角を曲つた横町です。うちの前まで行つて、戸を開けて、「お絹さん遊びませう」。といつて行きました。

斯の樣にしたらどうでせう。私はこんなに話して行かうとするには、先づ教授前、朝に一回この說話要領を讀んで、これはどんな所の事だらうかな、この子は幾つ位だらうなーと考へてゐますと、すぐ目の前に

其の子即ち小太郎なの文吉なのお梅なの一郎などがニコ〳〵として現はれて來ます。又目に角立てて喧嘩したり、泣いたり笑つたりして現はれて來ます。するとこの話の筋が順序よく、具體的に展開して行きます。かうなつた境地を作つて教室に出ると、子供も喜んでこの劇中の人物となつてくれます。私の話も亦自己感動に打たれて話の筋が面白いやうに運んで行き、時には涙がにじみ出る事すらあります。すると屹度兒童の眼にも涙の露の光るのを見ます。かう書いてゐる今にも一年の死んだ親猿を子猿が温めた話を語つた時、あの腕白な茶目な子がくるくるした眼に涙を一杯ためて聞いてゐた姿がまざ〳〵と現はれて來ます。所が私が此處はこんなに作つてやらう、ここはこんなに飾るがよいなどと思つて話の筋を意識的に作つて出たのでは子供は一寸面白いとは思ひますが、心の底から私の行く所に行つてく

れない樣な氣がします。それから心底からつまらないなんて思つて出た時は、子供も私と同樣にあいてしまひます。故に、

假話は教師の腕で自由に具體化され、兒童の環境と一致した所に起つた事の樣に作られます。然しこれを教師が生かして行かうとするには、先づ教師自身が藝術家とならなければなりません。

と言はなければならぬ事と思ひます。

ケーベル氏　盛夏漫筆　（思想論文）　岩波書店
阿部次郎氏　美學　同　文館
藤井博士　リップス倫理學の根本問題

第四節　假話の教授法へ

假話である、實話であるといつて別に教授法が異つてゐる解ではありません。唯假話は話の性質上所謂作り話ですから、教師も自然自由に改作も出來ますし、自分の心に副うたやうに具體的にする事も出來ます。其處に教授法上の用意の異ふ所があるのです。次に其の用意の二三を申しませう。

具體化する事

尋常小學修身書卷一第十三を見ますと、「親のいひつけをまもれ」といふ題で次のやうな假話が出てゐます。

これはお梅が弟の一郎と共に庭の掃除をする所なり。此の日は休日の事とてお梅と一郎とは朝早くより机のまはりを掃除せしに母は之を見て「まことに奇麗になりたり。」と褒め「更に庭の掃除をせずや。」といひしに二人は直ちに之に應じ、姉は竹箒を執り、弟はごみとりを持ちて、かひ〳〵しく庭に出で學校の事など互に睦まじく語り

ながら掃除しをるなり。

と、挿繪の説明の形になつて出てゐますが、私共は話する時はこんな簡單な説明でなく、もつと子供の境遇に引合ふやうに具體的に話して行かなければなりません。さうするにはどうしたらよいかといふに先づこの話は、

日曜日に於ける兒童の生活の一面をスケッチしたものです。

から、この話を容易く受入さるやうにする爲に休日に於ける兒童の生活の有樣を問答します。問答は恐らくこんな事になりませうか。「昨日は日曜でしたね。みなさんは朝何時頃に起きましたか。」(昨日は何曜でしたかといふやうな問答は私は致しません)「そして朝御飯前にどんな事をしましたか。」おにいさんは。」こんな問を出しますと、子供は勝手に思ふ事を話す爲に一寸教室の中が騷しくなりますが、私は構ひません。少し位のくつろぎはあつてよいと思ひます。子供を靜かにさせるばかりが能ではありませんからね。そして潮合を見て藝術的の素質の多分な子に話させます。すると他の子供も傾聽しますし、一生が立つて話す時は之を傾聽するのは共同生活にまでの訓練です。これがなければ其の教室には道德がなく、唯强者跳梁の世界があるのみだと思ひます。勝手に話す時は話させ、一生の話す時は聞くやうにする所に自由と自制の美しい調和が存じます。私共の教育活動は活動其の者が纏つた藝術でなければなりません。

斯くして後、掛圖を出して「御覽、この子は今何をしてゐる所ですか。」「この二人の子は何でせうか」こんな問は、兒童全體が答へてよい問です。一一一生起立談話といふ形で話さすものではありません。かうして「さう〳〵姉さんと弟と二人でお庭を掃除してゐますね。それ姉さん

は塵取を持ち弟は箒でそれへごみを入れてゐませう。この二人の名をいひませうか。……姉さんの方はお梅、弟の方が一郎です。おう一郎さんがゐますね。この一郎さんも丁度今年は尋常一年です。お梅さんの方は何でせうね。」といはいひますが、今「この繪の話をしませう。」とは言ひません。つまり、

掛圖は多くの場合、話の出發點を作り學習しようとする心、即ち學習意志を喚起しようとするに用ひます。然しさうした後は、掛圖を離れて教師の談話を進めて行きます。

やがて其の次に移りますと、「お梅と一郎とは朝早くより机のまはりを掃除せしに」といふ一句にぶつつかります。これを考へて行きますと、恐らくこの二人は勉强部屋を持つてゐた事でせう。姉さんの机と弟の机と二つありましたが、平常は兎角急いで學校に行き、急いで遊びに出るといふ風ですので、中々思ふ樣に机のまはりがキチンとしません で、お梅は朝起きるとすぐ「一郎さん私共の机のまはりをかたづけませうね。」といふと一郎は「えゝしませうさう〳〵僕は昨日の晩方紙をちらばしたまゝで外へ出たつけ。さあしませう。」といつて二人で部屋に行きました。とやつて行きましたが、偖其の机まはりを片附けた事も詳しく活寫して行かなければなりません。そんなに考へて「そしてお梅は本や雜誌を本箱に順序よく入れ、硯の中をきれいにすると一郎も机の抽出しを開いて圖畫や書き方の成績品が折られたりしわくちやになつたりしたのをなほしてきちんとして居るので、四疊半の部屋も大分片附いて來ました。其處へ折柄緣側の邊の拭掃除しようとした母が來て、

「おゝよく片附きましたね。大へんきれいになりました。ついでに

二人でお庭があんなになつてゐるから片附けませんかね。」

といひました。二人は一寸顔を見合はせたが、お梅が「えゝここを掃いてからやりませう。」といふと、一郎も「えゝ僕も手傳ひます。」といひました。母は「では丁寧にやりなさいよ」といつて行きました。で二人は一郎は障子の邊を打掃で掃ひお梅は箒で掃つてやがて庭へ出ました。

そして戸口から出ると、お梅は「一郎は私は箒ではくから、あなたは塵取を持つて、其の邊の棒切など藁くづや大きい紙切を拾つてね。」と二人で仕事を分けてお庭に行きました。廣いお庭の種々の木は枝を交へて青々としてゐます。二人は一郎は木片なの繩切などを拾つてはごみ取りに入れて塵ために棄て、お梅はようく其の邊をはき、時々お梅が塵を一所へよせると「一郎さんこれを取つて」というて行つては取るといふやうにしたので、十分ばかりすると大へん片附いて氣もちよくなつた。掃除が終つて二人が腰を延すと、涼しい朝の風が胴のあたりを吹いて何ともいへん程氣もちがよく、又きれいになつた庭は見るからに氣持がよい。二人は何といつてほめられなくともこのきれいになつた丈で十分氣持がよいのでした。すると臺所の方でお母さんがお梅さん一郎さんもうご飯ですよ。」といふので二人は急いで掃除道具を片附けて家へ入りました。入るともうお父さんも餉臺の所で待つて居ります。そして「お梅も一郎も今朝は大へんよく働いたね。」とほめて下さいました。といふ風に、

説話要項を出來るだけ其の土地の事情に應じて具體的にして行き、筋書のみを話すやうな事はしません。話の主人はこんな時にはこんな事をいふだらうし、こんな時にはこんなに話すだらうと、故師は話の中に入りこんで考へて、十分消化した上話して行きます。そし

て主人公の動作や言語を寫し出す時には其の人物が眼の前にゐたやうな氣分になつて話します。

藝術的方面

例話の教授の巧拙といふ事はこんな時によく現はれます。しんみりと聞く樣な可笑しい時は笑ふやうな話をするといふのは、此の邊に用意を運らした時に始めて可能な解です。從つて話す時も教師はお梅や一郎がああいつた、ああ話したこんな事をしたといふに、丁度棒でも話す時のやうに身振りもなければ手眞似もない眼一つ動かさぬといふやうな話しぶりでは駄目です。お梅の動作は女らしく、一郎の動作は男の子らしくなければなりません。そして仕事をした事を話す時には、教師も仕事をしたやうな氣分になつてお梅が箒を持つてさつさつとはいたやうにし、一郎が視線を足下に垂れて木切を探すやうな氣分にならなければなりません。教師がさういふ氣分にならんでどうして話が活きて來るものですか。又兒童が身體を前に出して聞きとれるものですか。名優の舞臺上に於ける苦心談を聞いた事があります。彼が判官になる時本當に腹が立つてこみ上げて來て師直を切りつける相です。でないと觀客と俳優と氣分が完全に調和しない相です。次に他の方面のですが苦心談を抄錄しませう。

舞臺に出ると私は此の頃よく自己催眠にかかる。私自身がすつかり劇中の人物になり濟して劇の人物と自身との境が全然意識されなくなる。だから舞臺で泣く場合はほんとうに泣いて居り笑つて居り怒つて居るのです。劇中の人物と自己との間に明瞭な意識のある間は劇の妙味「眞に迫る」境地は絶對に演出されるものではない。當時の私の氣持が眞に迫るのではない。眞そのものなのである。

尙最後に繰返すが、私の舞臺に轉がる生命は唯眞劍一つです。四つに組んでネジ倒す勢一杯の氣持だけです。（井上正夫氏改造大正十一年八月號）

約言すれば

話は飽迄も藝術的にします。從つて敎師も藝術家的になつて話をします。

といふ心持でなければならないのです、さうです。斯の場合の敎師は藝術家です。然らば如何なる藝術家であるかといふに、

話の筋（說話要領）――兒童

との間に立つて、話の筋を兒童の目の前に立ち目の前に語つて活躍させ、其の心をつかんで作者と同じ樣に踊らせようとする、媒介藝術家です。即ち芝居の俳優、活動寫眞の辯士などと同じ地位に立つでゐるものです。そして彼等よりももつと氣轉がきいて人見て法說く事が巧みでなければなりません。脚本にある通りを話すのではいけません。子供を見ては其の地方々々の習俗に相應じたやうに話して行きお梅と一郎の話でも朝飯前に仕事をしてしまふ風俗の所はその樣にでない所は又其の樣にして行き、子供が騷いだらもつと巧みに話して行くやうにするのです。

斯く考へて來る時、私は藝術化に意を注いで居る敎師が、あまりに講談師や活動の辯士の眞似をして、し損つて下手な講談師、下手な辯士となつて盛んに聲色を使つたりし、しなを作つたりして下品な動作を壇上に演ずる事は他方の極端として戒めねばならぬと思ひます。例をとつて見ますと、私共が落語などを聞く時話の臺本其の儘を暗記して臺にひきづられつつ所々忘れてはドキマギして話す人を見る事があ

ります。これは彼の說話要領を文語の口語譯する人に當りませう。又話に餘りに冗辯と大袈裟な表情が多過ぎるのを見る事があります、が、これは餘りに大業で聞いてゐても聊か滑稽に又一種の惡感をさへ抱くやうになります。丁度餘りに過ぎた藝術化の話と同じ事でせう。然るに眞の名人といはれるものはさうでありません。彼の態度には餘裕があります。手眞似も身振りもありますが夫れは鼻につく程のものではありません。あくどい所がなくつて上品です。私共が目指す敎育藝術も亦當に斯の如くでなければならないと思ひます。最後の目指すべき所は其處です。

話を元へ戻して再び掛圖の事に入ります。よく出來た掛圖は恰も芝居の舞臺上の背景に似た作用をするでありませう。お梅と一郎の話で申しますと、二人はこんな所で働いたのだなー、と思ひ話す中常に其の背景が目にちらついて居ます。故に話の筋が其處へ行つた時、お梅と一郎の話でいへば二人が一生懸命に掃除をしましたといふ所へ行つた時、ほーれ、こんなに働いたんです。」と再び口の方から行つた藝術を目から入れるやうにします。斯くして耳からは(敎師)の話(音)、目からは敎師の動作と掛圖といふやうに心に入れて行つて、兒童を藝術的陶醉の境に沈ませてやるのです。即ち

掛圖は話がその場面に行つた時、再び提出して感じを强める。用に立てるやうにするのです。

佐々木吉三郎氏　敎育的美學中卷　敬文館
佐藤熊治郎氏　敎授方法の藝術的方面　目黑書店

第五節　實話の考へ方

實話は其の名の示してゐる如く實際にあつた話です。主として歴史上にあつた人物の話でこれを分類すると次のやうになります。第一人の側から考へて見ますと、

一　御聖德に關する話
二　日本國民の話
三　外國人の話

に分れますし、其の分量からは

一　逸　話
二　傳記的例話

に分れます。松平信綱が正直にした話(尋二)、馬を大切にした馬子孫兵衛の話(尋三)、仕事をはげめの圓山應擧の話(尋四)、水夫虎吉の話(尋五)の如き其の人の一生の傳記を語つたのでありませんで、一時の事ですから逸話といふべく、二宮金次郎先生の話、上杉鷹山渡邊登の話の如きは傳記的の話であります。話の性質から分けますと

一　常時的例話
二　變時的例話

となります。木口小平、谷村計介の話の如き、二宮金次郎先生の孝行、渡邊崋山先生の友愛伊藤小左衛門の協力の如き中々常時はないもので國家の事變か人倫上の非常時にしか起らぬものですから變時的例話で佐太郎の公益作兵衛の勤勞の如きは何人もが經驗する事ですからこれを常時的例話と致します或はこれを常道的例話權道的例話としてゐる人もあります。人物からいひますと、

一　偉人の例話
二　善人の例話

に分れませう、豊臣秀吉、吉田松蔭、西郷隆盛、加藤清正の如き政治又は事功的偉人即ち英雄豪傑ですし、ソクラテスの如き中江藤樹の如き道德的偉人即ち聖人です。鈴木今右衛門、おふさ作太郎、儀兵衛、孫兵衛と私共は其の名と行とを聞いた時、全く前者とは別な感に打たれます。此の人等は善人です。孔子も善人は吾得て之を見ず。恒あるものを見るを得ば斯れ可なり。」といつてゐますが其の滅多にない善人です、然らば善人とはどんな人かといふに、生れながら性質の善い人ですか、學問修爲の工夫を積んで聖人君子といふ境までには行つてない人といふ意味です。

子曰善人吾不得而見之、矣得見有恒者斯可矣。（論語述而篇）

子張問善人之道子曰不踐迹不入於室、（論語先進篇）

其の外積極的に善を勸める積極的例話と消極的に惡事をなした人を擧げて惡行を戒める消極的例話を區分する事が出來ます。

第六節　實話の價値

實話は即ち實際に在つた人物の話であります。そして其の人物は多くは大人です。大人のしたよい事を例話としてゐるのです。故に多くは人格的背景を持つて私共の目の前に現はれて來ます。即ち小太郎や文吉やお梅や一郎と異ひ一生の間に何かの事をして死んだ人です。故に其の何かをして死んだ人といふ人格的背景を持つて私共の目の前に現はれて來るのです。然らば實話は修身教授上どんな効果があるかといふに、其の話を聞いて「おー」と感服し「えらいなー」と歎稱

する藝術的効果を目指してゐるのです。其の「おー」と感服し「えらい」と歎稱した感情がやがて私共のなさんとする意志を刺戟して不知不識の間に私共の道德的行爲の上に影響して來ます。實話の價値は實に其處にあるのです。今次に之を細說しませう。

御聖德に關する話　皇室に關する話はこれを謹話するによつて私共の胸の中にある皇室に對する崇敬の念を目覺して行かうとする價値を持つてゐます。私共は日本人である以上何人も皇室に對しては何とも言へん崇敬の心を持つてゐます。然し平常は大抵忘れてゐます。實に皇室の御恩德は私共が忘れ居る程大きいのです。赫々たる太陽の下に其の限りなき惠を受けてゐながら、之を忘れてゐる如く、私共も至らぬ隅もなく、屆かぬ果もなき皇恩は忘れてゐます。夫れを御聖德を語るによつて、「そうです。本當に天皇陛下は有り難い方です。其の有り難い天皇陛下はこんなに御德が高いのですね。」と私共が持つてゐる崇敬の念に反つて之を目覺し、更に深めて行かうとするのです。私共は教師の談話によつて兒童にはない皇室に對する尊敬の念を附けて行くとは考へたくありません。教師も兒童も共に持つてゐる尊き方に對する崇敬の念を目覺して行くと考へたいものです。

尋一　十六　天皇陛下　二十五　よい子供
尋二　十五　天皇陛下　二十六　よい子供
尋三　一　皇后陛下　十五　皇大神宮　二十七　よい日本人
尋四　一　明治天皇　二　能久親王　二十七　よい日本人
尋五　一　我が國　二十七　よい日本人

關係材料はこれ程ありますが、いづれもこの精神で話して行きたいと思ひます。

所で中には余りに詳しく調べ過ぎて奥向の事や御調度の事や女官の事などを事細かに話して行かうとする人がありますが、これは私は余り賛成致しません。明治神宮の建築の事に當られた人の話に、内陣の中の御本殿は板塀にして全部かくしてしまふ事もなく、塀なしにして全部をあらはにするのでもなく、透塀としてチラリチラリと見えるやうにして、神聖感を失はぬやうにしたといふ事があります。顧るべき事と思ひます。余り何もかく話し過ぎて曠野に立つた宮殿の如き感を與へてはなりません。

偉人の話　廣々として果しもない曠野を眺めた時、晴れた夜燦爛と輝いて居る滿天の星斗を仰いだ時、私共は全く其の廣さや大きさやが備へてゐる力を大きいなーと讃美したくなります。而して果ては其前に跪きたくさへなります。此の感じを畏敬の感と申します。道德偉人の話を聞いて起る感じはこの畏敬の感です。二宮尊德先生の話を考へませう。行燈に衣服で被ひをして深夜人が寢鎮つてから經書に目を曝し會心の所へ行つては「此處だ。」「此處だ。」と獨語しつつ東天紅くなるまで勉强し續けた、其の不撓の意志と偉大なる作業は到底私共凡人の至るべからざる所です。

「誰ぢや今頃まで起きてゐるのは。」

納戸の中より喚き立つるは萬兵衛なりき。ふけ行く夜の淋しき土間に、金次郎は蓆敷きて、今まで草鞋を作り居たるが、亥刻の鐘を聞くと共に、大學の卷を繙きて「此處ぢや〳〵」と會心の聲を漏しゐたりき。

「私でござります。」

「金次郎か。」とはらばひながら顔を見せて「おのれまた書物を讀むな。」

「亥刻から二時はお暇を戴いてゐるのでございます。それに燈油は私が買うて參つたのでございます。」

「それは知つとる。ぢやがな。燈油がいらぬからとて、無用の學問するを見てゐる理には行かぬのぢや。」

「さればどうすれば好いのでございます。」

「學問を廢めさつせへ。百姓に入用のない本讀むのをやめさつせへ。」

「然し叔父樣。これが私の樂しみでございます。叔父樣が毎晩お酒を召上る。それと同じ私のたのしみでございます。」

「今日からは二時の暇を取り上げる。本を讀む暇があつたら精出して草鞋作るのぢや。」

「(え)」。とは言ひたれども其の詞に不平不滿の氣は滿ちぬ。

「亥刻から丑刻まで一目も寢ず繩を綯へ。」

金次郎は其の後を見送りて、無念の涙をはら〳〵と流したるが、やがて再び綯ひかけたる繩を取りて、掌の皮のたゞるるまでも綯ひぬ。家族、雇人、其の他の者鼾聲を聞きながら、唯懸命に繩を綯ひぬ。將草鞋を作りぬ。

かくて善榮寺の鐘丑刻を報らせてより、金次郎は又大學を繙きぬ。されど又萬兵衞の怒に觸れんことを懼れて左右の袖に燈火を掩ひたりき。納戸へ光を見せまじとの用心なりき。從來は會心の章に至るごとに「此處ぢや、此處ぢや」と獨語したれども、今はこの聲を漏らすべき勇氣もなかりき。唯密かに唯靜かに齷齪として讀み去り讀み來る。丑刻は天明に近し。寅刻過ぐる頃は早や家人起出づ。この一時が金次郎の命なり。金次郎は眠るべき時だにもなく學問の

爲に盡しき。（碧瑞瑠圖作　二宮尊德から）

修身書のあの一段を出來る丈具體的に描いたものです。此の一場の物語から受ける感じは暴虐な意志に對する、强固な意志の戰爭而して强い意志の勝利而も物質的でなく精神的な勝利に向つて起る崇敬の心が起した面白味です。意志に對する面白味です。渡邊崋山先生の刻苦勉勵も亦、慘憺たる運命に對する强い意志の抵抗といふ强さが起してくれる美感です。而して皇室を尊べに現はれた豐臣秀吉の聚樂第物語はこの强い意志を以て勝利を得た人が、其成功の曉に今一度其意志を以て創造した大きい事業に對する讃美の心が生んだ崇敬の精神です。私は偉人の話の價値を、弱きもの、小さきものが、强きもの大なるものに對して起す崇敬の心といふ所に置き、そして此崇敬の心が私共人々を道德的に高い世界のある事を示してくれる所に置きたいと思ひます。實に此のやうな偉人の話を聞くによつて私共は道德的に高い世界、强い意志が非常な惡戰苦鬪しつつ其の道德の世界を創造して行く有樣はこんなものかといふ事を體驗して行くのです。

善人の話　これが善人の話になりますと大分趣が異ひます。卷三にある本居宣長翁の整頓に力めた話を考へて見ませう。宣長翁はそれはたしかに大偉人です。然し例話のやうな事柄は全く善人の話です。本をよく整頓して置いて何の本の隣は何本とよく分るやうにしたといふ事は、やらうと思へば僕だつて、君だつて出來ることだ。」といふ事です。從つてこんな話から來る感じは强い感激を伴ふものではありません。日常の小さな事で、成程僕もこんな事があるねー、と考へさせるやうな話です。稻生はる女の話の如きもそれです。祖先に對する每日の禮拜を缺かさず、忌日忌日の祭を尊重に行ひ、珍菓の如きは

先づ祖先の靈に備へるといふ樣の事は、決して夜を徹して、事をしたとか、砲煙彈雨の間に驅逐したとかいふ強い感激の下に學ぶ話ではありません。「わしにもこんなことがある。」と思つて聞いて行く話です。

偉人の話は私共に向つて遠い所に大幟を掲げて「斯うせい」と叫んで、人生にある偉大な所強い所、をまざ〳〵と示してくれる話ですが善人の話は「おい君、僕はこんなにしてゐるよ。」と近い所で囁いてくれる話です。そして私共が毎日の小さな事でよく氣が附かんでゐたり、をろそかにしてゐたりした事を、「君おろそかにせんやうにしようではないか。」と囁いてくれるのです。彼は強い美、卽ち壯美を現はしてゐますが、これは優美を代表した話です。一方はアルプの山を越えるナポレオンの繪に見えるやうな氣分であれば、一方は夕の鐘の鳴るを聞いてつつましやかに夕の祈を捧げてゐるミレーの晩鐘の氣分です。どちらも人生上の或るものを現はして人に迫るものあるに於ては一です。日常のもの、小さきもの、をろそかにしてゐる物見逃してゐるものの中の道德性を示してくれたのです。

其の強い感激を伴はない所から、あんな例話をとつてはならないと叫ぶ人があります。然しそれは明かに誤りです。前に申したやうに奈翁アルプ越の繪も十分な意味で美を現はしてゐると共に、晩鐘も十分な意味で美を現はしてゐます。ゴッホの畫いた烈日にをどつてゐる向日葵も强い美を現してゐる樣に、眞しやかな氣分で畫いたレムブランドの畫も矢張り美を現はしてゐます。道德の世界の事でも同じ事です。强大な意志が運命の悲慘と戰ひつゝ正しき勝利を收める話にも大なる道德性があるを同樣に、機に上る事が三度の飯よりも好きで遂ひに絣を發明した井上でんの話にも十分な意味の道德性があり

ます。岸を嚙む怒濤と暴風を現はした音樂にも美があると同時に、小川の囁きを現はした音樂にも美があります。萬事が同じ理です。所が音樂家などの中にはこの理をいはないで一概に修身教授は無効だと申します。困つた事です。余りに偉大をのみ追求して御覽なさい其の極まる所は喧嘩と而して求めた後の幻滅です。革命前のロシヤの百姓は革命さへすれば下々の農民も働かないで食へ、香水で手を洗ふ事が出來るといふやうに煽動に乘つたといひます。余りな偉大を求めたものの幻滅をよく現はしてゐると思ひます。

第七節　實話を話すに當つて

實話の話し方といつても別に假話と異つた事がありません。私のやつてゐる用意を述べますと、先づ教師用の說話要項を熟讀し、それからこれに關して原據となつた書物をよく讀みます。そして此の時には此の人物はどんな心になつた事だらう。どんな話が其の間に行はれた事だらうと想像して行きます。すると私には一種の自信に似た感が起つて來ます。そして自分が舉山となり高橋文平のやうな心となるやうな氣がします。さうなつた時、敎壇に立ち出來るだけ具體的に話して行きます。つまり話の筋を劇化して話して行きます。其の時は私の心の中には舉山先生、其の父母、高橋文平といつたやうな人が生きた人の樣になつて出てては其の役目を果して行きます。私は我ながら「今日の話は氣に入つた。」と考へるのはこんな時です。

私は殆んど說話要領其の儘を語る人を見ますが、これは以ての外の事だと思ひます。說話要領はほんと話の筋です。私共はこれに人格を與へなければなりません。生きた人にして生きた人が話するやう

にして行かなければなりません。例話の藝術化といふのはこんな事です。而してさうするには其の事實が十分一點あぶなつかしい所がなく腹に入り、少しも分らん所がないといふやうにならなければなりません。然しかくいつた所でそれは理窟です。今其の例として卷三第六孝行の渡邊崋山先生の事をばどんなに具體化するかを述べて見ませう。教科書の教師用は、

是より先登は、行末學者となりて世に立たんと志し、學問を勉強し居たりしが、一日常に親しく交れる高橋文平といふ人を訪ひて身の上の事を相談せり。文平言へるやう「御身が學者とならんとの志惡しとにはあらねど、今の急を救はんには此の事然るべからず。御身は天性繪心に富める人なれば、畫家となりて生計を補ひ早く兩親の安樂を圖るに如かずと勸めしかば、孝心深き登のいかでか躊躇すべき、

直ちに或畫家につきて繪を學ぶ事となれり。時に登十六歳なりき。

と書いてあります。此の時私共の調べなければならん事は彼が儒學に志したのは其の十一二の頃の事で、師は鷹見星皐といふ人であつた事。高橋文平は萬事よくこの一家の事の相談にあづかつてくれた事。繪の師として最初についたのは白芝山といふ人であつたが、此の人卑劣な人で崋山先生が貧窮で禮物を十分出さぬのをふくみ辭を設けて破門した事。其の後金子金陵といふ人について學び、やがては畫家としても優に一家を成し、其の所作は今日大なる價を呼んでゐる事です。

斯くした後、もつと具體的にしよう。教師の考で、どんなにも話し得る所を探さうとします。前段に申しました事實は、事實として一言の加減を許しません。然し尙本には自分の力で自由にこなし得る余地があります。媒介藝術家として手腕を振ひ得る余地があります。此

處から教師は媒介藝術家となつて行くのです。それは、

學問を勉強しゐたりしが、

身の上の事を相談せり。

の二箇所です。それから繪によつて生活の資を得た所の話です。貧窮の間の勉學です。中々生やさしい事ではありますまい。幸ひ父が刻苦して寫取つた經書類がありましたが、中々それでは足りません。人から借りそれを寫したのでした。而して勉強の時間は父の看病の暇で其の眠つた時です。起きてゐては胃腸病になやまされ、時々には癪に襲はれます。或はさすり、或は藥を勸め、種々世上の話をして父を慰めます。其の間に病苦の息つた所を見ては寸暇を盗み聖賢の書に目を曝します。飯炊く間は其の勉强の爲のよき時間でした。或は物の書により、或は自分の力で具體化して行く所です。祐筆の高橋文平

身の上の相談をした時の事もさうです。弟共は或は寺に僧としてやられ或は他鄕へくれてやり、旗本の下婢にやります。然し迫り來るは一家の貧苦、殖え行く物は借財といふ有樣です。「一家の跡目を繼ぐわしの腑甲斐ない事からだ」とは先生の考へた所でした。何とかこの苦しい所を切拔ける事が出來ないものか。何につけても頼みとなるは高橋樣。あの人へ相談しやうと、或日高橋文平を訪れたのでした。一家の窮狀を事細かに物語り、其の差圖を仰ぎます。手を拱いた高橋氏は一々つく〴〵と聞き、要所要所は「うん、うん」と受け答へをして聞いたのでしたが、やがてきつとなつて申しました。

「唯今の所市郎兵衛殿の藥代を作るのが、第一ぢや。それに學問をしてゐたのでは今の今金錢を手に入れる譯に參るまい。虎之助殿の志望は誠に見上げたものぢやが、それでは今の父上をお救ひ

申すことはできぬ。それよりは、貴殿は相當に畫才があると承る。何んと今から考を變へて繪の稽古をなされてはどんなものぢや。及ばずながら師匠をお世話も致さう程に。」

と親切に申してくれましたので、元來が孝心深き虎之助の事でありますから、幾ら勉強したい學問でも父の病氣には代へられません。今更殘念だとは思ひましたが、

「仰せに從ひまする。どうぞ良い師匠をお世話下さりませ。」

其の聲は流石に濕んで聞えました。高橋文平も心から氣の毒に思ひまして、

「善う申された。お心は察し參らせる。然し虎之助殿繪も天下の名人となれば世の人から尊敬されますぞ。」

と力をつけました。

これは碧瑠璃園氏の偉人の少年時代といふ本が描いたものです。もつと文章をねつてくれるとよいと思ひますが、これでも餘程具體化されてゐます。更に次の一段は是非物語りたいと思ひます。

登の繪を描く技も日に日に上達して、近頃では立派に燈籠が描けるまでになりました。或時登は元氣よく歸つて來まして、

「お母樣、およろこび遊ばしませ。今日は私の繪が賣れまして、問屋からお鳥目を頂いて參りました。」と懷から青銅一貫文を取出しました。

「これが私の畫の代でございまする。」

母親のお繼は、お錢を手に取りながら、

「おゝ汝の書いた繪がお鳥目になつたかの。」

と手に入れた鳥目を悅ぶよりは、それ程までに上達した登の技を嬉

しく思ふのであります。先生のお周旋で日本橋二丁目の遠江屋初午燈籠の繪を賣つて參りました。」

「これも皆金陵先生のお蔭でござります。

市郎兵衛もにこ〳〵しながら、

「それは結構ぢや、これからも精々勉強するがよい。」

「それでお母様早速お父様のお藥をお買ひ遊ばしませ。」

「ほんに左様ぢやの、汝の腕で稼ぎ出した金で買たら定めて善く利くことであらうぞよ」

「俺の病氣も登の孝心には敵はぬと見えて、近頃は大分快くなつて來た。それに此金で藥を買つて服んだら、全然治ることであらう」

「あの事を聞きましたら爺もさぞ歡ぶでござりませう」

お繼は權平にも知らせて喜んで貰ひたいのです

お〻左様ぢや權平を招んだが好い

「いやお招びには及びませぬと」庭の縁から顔を出しました權平は

「只今お庭で承はりました。誠にお芽出度い事でござりまする。若様貴方は何んと云ふ有難い方でござりませう」と權平は、汚れた手拭を取り出して頻りに嬉し涙を拭くのであります。

「お母様私この事をちよつと、高橋様へ申上げて參ります」

市郎兵衛は頷いて、

「左様ぢや、高橋殿には是非知せねばならぬ原はと云へば、高橋殿の親切からぢや、早く參るが好い」

噂をすれば影とやら、其處へ案内もなく入つて來ましたのは、高橋文平でありました。

「何かお歡び事でござるかな皆様大分お脈かの御様子でござるの」

お繼は、先づ詞を掛けました。

「高橋樣おいで遊ばしませ、今日は高橋樣に歡んで戴かねばならぬ事がござりまする。」

「ほゝうそれは耳寄りな、何事でござるかな」

お繼は、手短かに事の次第を物語りまして、

これと申すも、皆高橋樣のお蔭でござりまするとと、改めて、頭を下げました。

「左樣か、たう〳〵望みを遂げられたか、それは何より結構ぢや。なに拙者のお蔭なぞはござらぬ、神々のお蔭ぢや、登殿の孝心に感じて神々が給はれたものでござる」

所で原據となる本を調べますと、兎角みんな話してしまひたがります。其處が私共の用心のし所です。例へば華山先生の話にして見ますと、或時道を歩いてゐたら池田侯の行列にあひ、思はず其の先供の者へ泥をかけましたので、散々打擲されましたが、主持つ身のつらさは主君の名の出るのを考へてきつとこらへました。して駕籠を見ますと中にゐたのは自分と同じ位の人です。あゝ人と生れてあんなに相異があるものか、僕も貧乏武士の子ではあるが、王侯將相豈種あらんやだよしよし學問で身を立てよう。立派な學者とさへなつたらこんな人共も僕を尊敬するであらうと考へて、學問に志したといふやうな話がそれです。興味ある話ではありますが、私はこの事は餘りに險奇であるが故に話したくはありません。

姉崎博士譯　ショペンハウエル意志と現識としての世界　上卷
文明協會譯　少年と道德　Foister Jugendlehre. の抄譯

第三章　訓話の研究

第一節　訓話の分類

訓話といふのは、例話の人物の話からか、或は獨立に兒童と共に道德上の事を考へて行く働きです。教科書の題はこの訓話の題目です、友達に親切であれ。不作法なことをするな。忠君愛國勇氣といふ樣に例話の題目を出すのではなくて、訓話の題目を出してゐます。斯の孝行、勇氣慈善、整頓といふやうな題はやがて道德の目ですから德目といひます。

所でこの德目による訓話を考へて見ますと、種々の觀點から種々に分類されるのです。其の第一は先づ例話を語り、それに附帶して訓話を語つて行くので、第二は別に例話を語るのでなく、獨立して訓話のみを語つて行くのです。尋常科では卷四の禮儀のやうなのは訓話のみが獨立してゐる課で高等科になりますと多くの課は例話を語る事なく訓話のみの課です。で訓話は、

附帶的訓話

獨立的訓話

に分れる解ですが、然しこれは徹底的に正しい分類ではありません。私共は一時間を通じて道德上の理論のみを說いて行く事はめつたにありません。そんなにしてゐては第一話が乾燥になつて駄目です。何といつても修身の話は適當な例話で活きて來ます。然しそれは先づ措く事にして、人物の例話を語つて訓話に及ぶ場合を考へて見ますと、其の例話と訓話の結び附け方が大いに問題となります。更に訓話

の例證として例話を引く場合も考へなければなりません。

訓話其の物の性質から見た分類

所がこれは單に教授上の形から見た分類ですから、私共はもつと根本的な、教授はこの根據から考へられなければならないといふ方面から考へて見なければなりません。さうするには私共は道德其の物の性質から考へて行かなければならないのです。すると先づ第一に出て來るのは、整頓なら整頓について、學校から歸つたら書物を順序よく列べて置きなさい。机の中をちやんとして置きなさい。袴は自分でたゝむなり又は一定の所へ掛けなさい。傘も置場へ丁寧に痛まんやうに立てゝ置きなさい。自分の下駄や履物の置場も一定して置きなさいといふやうに、義務の目の方面を指導して行く方面の訓話があります。義務の目の方面の訓話は外社會に存する道を說いて行くのです。多くの人は訓話と申しますとこの道の方面の訓話即ち義務の目の訓話しかないと思つてゐるやうですが、尙其の外に更に重大なものがあります。それは自分の心の方面の訓話です。

心の方面から考へて行きますと、私共は道德に向ふ事が出來る能力があります。例へは父母に向つては私共は何といつても愛敬する自然の至情があります。この情を備へないものは人として一人もない事でせう。更に困難な事に向つても之に抵抗する勇氣も人の天性具備してゐる所のものです。自然の現象に向ふ時は之を解釋して雨の降るのはどういふわけ、風の吹くのはどういふわけといふやうに一定の說明を與へる知力があります。或は之を能力心理學の舊窠に陷つたといふ人もあるかも知れませんが、靜かに私共が自分の心を反省して見る時どうしてもこんな力、力といつてわるければ心の働きがある

と考へざるを得なくなつて來ます。モイマンなども能力心理學のやうな意味ではないといひつつ注意力記憶力といふやうな能力を認めたのでした。

能力心理學と申しますのは、吾々の精神には知力、感情は、意力又は感性の力、悟性の力といつたやうな精神作用を營む能力が具はつてゐる事を認めた一派の心理學派です。而してこの能力は精神作用を離れて存するもので、此の能力が精神作用を生み出すものだといつたやうな考へ方の心理學です。

で訓話の第二の方面はお互に反省して行つて、私共にはこんな自然の至情がある。然しこれは正しく働かせなければ往々にして邪な路に走り易いものである。勇氣の如きも無暗に出し過ぎれば猪勇となつて他人に迷惑を掛ける事になりますし、知力の如きも悪い目的に使ひますと知力應用の盗賊といふやうな飛んでもない事をする事に用ひられたりします。父母に對する愛情でさへも僻すれば悪行に陷る事があります。君國の一大事に際會した時私共は父母の愛をも切捨てなければならぬ事さへあります。それを囚へられては僻した事になります。こんな方面の考察は徳に關する訓話と申しませう。これが訓話の第二の方面で、全く各自の反省によつて考へて行くべきものです。

第三に現はれて來ますのはあゝしたい、かうしたいといふ欲望と、それに連れて起る心の反省の方面です。授業が終りました。子供等はすぐ屋外運動場で遊びたいのです。先を爭うて外へ出ます。其の勢で扉ががちやんとひどい音を立てて開けられます。そして六十人の子供が皆出てしまつた後の扉は全く開けたまゝで閉められません。

此の時子供の心は遊びたいといふ心で一杯になつてしまつて、出入きまりやなんかを皆忘れてしまつたのです。こんな事は獨り子供等ばかりでありません。私共大人にも非常に多い事で思へば全く恥しくなります。こんな狀態を孟子は放心の狀態と申しました。放心。――さうです。放心がどんなに私共の精神生活道德生活に多い事でせう。欲望で胸が一杯になつたのです。こんな事は其の事の過去つた後に反省して始めて「あー」と考へるだけの事です。そして反省によつてそんな過失を少くする事に力めるより外には道がありません。又「あの時にはこれに氣がつかなんだ」。と考へる事が度重れば自然にさういふ過が少くなるのも亦事實であります。

これは欲望が激しく起つた場合ですが、激しくない時はそんなでありません。欲望が一方に起りつつ一方には「してはならぬ。」「しなければならぬといふ當爲の感が湧いて來ます。又こんな欲望にかられて悪い事をしますと「あーせねばなかつたに」といふ感が起ります。良心の感情の方面としていはれる制定の方面、審判の方面といふのはこの事です。よそへ使ひに行つての歸るさ、お金を落しました。正直にいふと母に吐られます。安逸を欲する欲望は知らん風をせよ。又は嘘をいつてごまかせといひつけます。すると心の奥なる良心は「いや正しきをいへ」と命じます。所で私共のやうな凡天は中々此の良心の聲には聽從し難いものです。此處を支那の古聖禹はいつて「人心惟レ危フク、道心惟レ微ナリ。」と示してゐます。故に物の道理を明かにして私の心に引かれる事なく、よく熱心に修養して人道に合するやうにしなければなりません。此處を禹は「惟レ精惟レ一。允ニ厥ノ中ヲ執レ」といつてゐます。苟くも生を此の世に享ける程の者は何人も持つ

てゐる道德的經驗です。私共は此處を一歩一歩に修養して行きたいと思ひます。讀者諸君諸君も私と共に或は財の利欲、色欲乃至は名聲を世に拍しようとする欲に身を燒かれて不知不識不道德の境に沈む事が多い事はありませんか。私の經驗によりますと、斯る經驗は尋常一年にもありますし、三年頃になりますと、純な形で良心の勝利を誇る機會が多いやうに思はれます。修身教授の訓話はこの方面に及んで相共に反省して欲望を抑ふべき事の多い事を考へて行きたいものだと思ひます。放心の狀態にある事は常にある事ですが、かういふ葛闘の狀態にある事も度々あります。而してこれは共に自已反省するによつて容易く見出される事です。

する訓話は其の本質の上から分類して見ますと、

義務の目を主題とする訓話　道的訓話

各人の力を主題とする訓話　德的訓話

各人の欲望を主題とする訓話　善的訓話

の三つに分れるわけです。私共の教授法は實に此處から出發して始めて確かな根據に立つ事になるのです。

西　博士　道德の特質について　（哲學研究論文）

谷本博士　道德革新論

林　博士　佐々木秀一氏の移身教授法（前出）

泉水戸部二氏著　實際的教授法上卷）

河野清丸氏　自動主義より觀たる現今教育の批判　明誠館

Foerster Jugendlehre

第二節　例話と訓話の結びつけ方

例話から訓話へ

最も普通の形の修身教授は、先づ人物の例話を語り、やがて之に基づいて訓話を下すといふ事だらうと思ひます。所で最も困難なのは其の例話から訓話への移り方です。どうも私共も困難しましたし多くの教授を見ても斯の點の滿足に行つたものを發見する事が多くありません。中でも最もまづいのは、例へば修身卷三第十七の儉約の話をした後に、

「なんと皆さん德川光圀は感心な方てはありませんか。皆さんも德川光圀のやうに儉約をしなければなりません。」

と判に押したやうな紋切型の訓話を下す事です。或は、「皆さんこの話を聞いてどう思ひますか。」と問ひますと子供は決りきつて「德川光圀は感心な人だと思ひます。」「どんなにしなければなりませんか。」と問ひますと、賢い子供は早くも題目を讀んで「儉約をしなければならないと思ひます。」といひます。これが所謂自學主義的な教授法だといひますが餘り感服しません。まあ感心の押賣りです。有難くない事です。それから概念の押しかぶせです。儉約しなさいといつた所で、恐らく子供には儉約の解釋が必要なんでせう。子供の內的生活の流れと交渉を持たないでどうしてたゝ空疎な儉約をしなさい位の命令を下した許りで何の効果がありませう。私共は感じの押賣りと、概念の訓話とは必ず避けなければなりません。

でこんな結び附け方は未熟なもので、第一形が整うてゐませんから、此處に形を整へようとして例話の內容を分析し、それから理詰めに訓話を引き出さうとする。つまり例話の分析から三段論法的に訓話を導き出さうとする仕方です。例へば前の例の德川光圀の話についていひますと。

「徳川光圀はどうしようとしたか。」「奥女中の紙をむだに使ふのを止めようとした。」

「それは何故か。」「無暗に紙を使ふと費用が多くかかるから。」

「それでどうしたか。」「河岸に桟敷をしつらへて紙を抄く所を見せた。」

「それからどうなつたか。」

「これで我々はどうしなければならないといふ事が分つたか。」

「倹約せねばならぬといふ事が分つた。」

「水戸家で女中共が紙を倹約したのでどうなつたか。」「徒な費用がからなくなつた。」

「我々は何故倹約せねばならないか。」

といふ樣に理詰に問ひ掛けて、一つの論文を口頭で作つて行かうとするのです。形は整うてゐます。然しなんだか一寸冷たい所がある樣に思はれます。何處かを一つ突くと直ぐ壊れ相に思はれます。知的に過ぎた訓話です。更に今一つ同卷第二十五公益の話について考へて見ませう。

「佐太郎が作ると稲の取れ高はどんなでしたか。」

と問うて行き、「で村人はどうしましたか。」「聞きに來ると佐太郎はどうしましたか」と問うて行つて、丁寧に敎へた事を話します。「麥畑からの歸りに俄雨が降つた時は。」「稲を作る爲の用水を田に引く頃にはどうしましたか。」「村役人になつた時にはどうしましたか。」と問うて行き、「すると佐太郎のした事はみなどうなる事なのです」と聞いて世の爲になる事であるといふ事に及び、「其の世の爲になる事をする事を公益といひます。」と事實から歸納して徳目に入り、やがて義務の目の訓話に入ります。實に理路整然として論斷の道筋に一分の隙間もない堅

實なものです。私はこのやうな行き方をば決してとるべからずと斷定するものでありません。又非難するものでもありません。「何と皆さん」から比べたら何程よいか分りません。教師を取扱ふ教師は一度は必ずこのやうにして論式を作つて行く必要があります。一歩も忽せにしないといふ所に兒童の道德性を陶冶するだけでも効果があります。

私の經驗を申させて下さい。哲學の端くれをかじつてゐる私は、修身を教へても兎角理論的の前段のやうな論證的に進んで來たのでしたが、でも何時でも何やら物足らない感が起つたのでした、それは今思へばかうした行き方は「何何なるが故に斯くなり。」のやうに故に、からといふ條件の上に築かれた知的構造だからです。多くの行爲の中から特に都合のよい所のみを寄せ集めた話を土臺にして論式を立てたからです。つまり抽象的知的になつた爲にそこに何とも言へん物足らなさが起つたのでした。それにあゝした論證は儉約を守ると金が餘つて世の爲になる。人の畑に土をかけてやると其の人の爲になる。土橋を石橋にすると末代までも保つて村人や通行人の利益となるといふやうに行爲の結果からしてよい悪いと斷じた倫理學上でいふ結果論的な取扱なのです。所で結果論は倫理學上成立しないといふ事は恐らく今日の定說でございませう。

で、私は他に道を求めたのです。即ち例話を語つて行きますと、後に其の人をば全い人として眼前に描き出さうとしたのでした。全人格を再現しようとしたのです。全人とは知情意の綜合なりといふ樣な似而非全人では無論ありません。私は主觀的個別的でありつゝ而も普通であり得るものは、感情に基づく判斷即ち美的判斷であるといふ

カントの所説に教へられつつ、取扱の行路を決めたのです。即ち佐太郎の話をしますと、「佐太郎はどんな人のやうに思はれるか。」と問うて見ます。此の場合兒童は決して感心な人です」といふやうな知的評價的斷定を下させるやうには無論指導しては居りません。氣分の上から想像する事にしてゐます、かくいふ私の目には絞りの手拭を頰冠りした篤實な百姓となつて佐太郎が寫ります。そして優し相な人となつて寫ります。勿論も優しい心の持主として佐太郎を描き出します。徳川光圀栗田定丞の如きは誠に几帳な人として描き出されますし、卷六の井上でんのやうな人はまめに働く人として寫つて來ます。そして兒童と教師の呼吸のぴたと合つた教室の空氣から矢張りそのやうな答が生れて來ます。

其處まで行きますと、そんな心即ち品性の人からにじみ出た行爲として其の人の種々の行を見て行きます。即ち佐太郎の場合について考へませう。夕方人より遲く歸らうとしますと、定めなき秋の日は急にむら〳〵と曇つて來て大雨を降らせて來ました。廣がる雲足を見て「これは雨、放つて置いては肥料が流れる。」と思つた彼は一生懸命に鍬取直して麥に土をかけたのでした。もう八分通り出來上る時、大雨が沛然として來ました。でも土をかけます。出來上つて隣の畠を見ますと、家の人は先程歸つて行つて、余り農に熱心でない彼の家は放任して居ります。「やれやれ、氣の毒だ、放つて置いたら肥料が流去る。」と思つた彼はすぐ又鍬をとつたのでした。暮れるに早い秋の日はもう足下が暗うございます。然し彼には其の暗さはなんでもありません。頻りに鍬を執つては土をかけます。この隣の畠に土をかけた行は、全く優しい彼の氣質から自然に生れて來たのです。唯見ては居れない

といふ氣分からしたのでした。やむにやまれん心から出た無理のない行です。このやむにやまれん無理のない心と行をば心學者は仁と名づけました。實に彼の行は仁から來たのでした。行爲の善惡は具體的な動機を以て判定します。あらゆる豫想した結果即ち志向に直接の目的となつた動機を加へた具體的な動機によつて判定しますが其の動機は其の人の品性から湧き出ます。故に行爲最後の責任の負荷者は其の人の品性です。私はこの議論に導かれて例話の人物の行爲を考へて行き、心からにじみ出した行として考へ行きたいと思ひます。

訓話と例話と

上に述べましたのは、私が考へてゐる最も普通の修身教授、即ち先づ例話を語つて次に訓話に移る仕方の教授法ですが、例話と訓話は此の外に訓話を語つて後其の例證として例話を語る事があります。其の模範的なのは高等一年の孝行の例です。孝について訓話を下しやがて變事に於て父母の重大なる過失を見た時には、自分の良心の命ずる行動を執るべき事を述べた後、平重盛の話を擧げてゐます。同情にある瓜生岩女の話。勤勉の伊勢屋吉兵衛の話皆夫れです。高學年の修身教授は專らこの形式が多いやうに思はれますし、昔の修身談は大抵此の形式に出たと思ひます。例を示せといふならば昔では心學道話、現代ではフェルスターの少年訓、更に佛教の說教の如きそれです。

この形式の行き方はそんなにむづかしい事はありません。同情を例にとつていつて見ますと、私共は自分の胸にふりかへて考へる時誰でも困つた人を見れば「可愛想に」といふ感が起ります。同時に友人等の失敗などを見ては一種の惡意的歡喜が起ります。同情に對する一

抹の暗影を與へるものは實にこれですと考へて行つて、やがて困つてゐる人を見ると可愛想にと心には思れますが、中々實行には現し難いものです。其の心を實行に現はすには勇氣が入ります。更に實行によく現はす人は本當に心の底から可愛想だと思つたからですと考へて行きさうした人の例として瓜生岩女を擧げて行つて話して行きます。誠に簡單です。で、この形で教授を進めて行き得るのは高學年丈であると普通考へてゐますが、私はさうは思ひません。低學年でもかうしてやつて行かれる事が多いと思ひます。忠義、孝行、規律を守るといふやうに繰返される機會の多い德目の例話の如きは、繰返した時にはもう訓話から繰つた方がよくはあるまいかと思ひます。

然しこれは兎に角本にある例話に訓話をつける場合の事ですが、私共が訓話を下しますには此の外に、一つの織なした訓話の中へ一寸短い例話を入れる場合も考へられます。又それが頗る有効です。例へば尋常四年の志を堅くせよの訓話をして行く時、一寸彼の奈良の興福寺で學問してゐた僧が天性痴鈍で中々成業しません。餘りの事に堪忍し兼ねてもう町へ出て反物屋にでもならうと思ひ立つと寺を拔け出で來ますと、折柄の夏急な夕立がやつて來ましたので其處等の堂の庇に一寸雨宿りをし、偖もうこの寺を出ようとするのだが」と思ふと一種の感慨が湧いて來ます。ふと足下を見れば雨垂の落際に小さい石があります、其の石は常に雨に打たれてゐますので凹んでゐます。これを見た彼は直下に悟つたのでした。「こんな細い雨垂すらも何年も打つて打つて打ち續けると堅い石を凹ます。天性魯鈍の余だつて勉め勵んで止まなかつたならば、成業の出來ぬ事はあるまい。」と考へて直樣歸つて師の僧にも其の例話し、やがて切嵯琢磨の功を積みまし

たので遂ひに僧都の位に上つたといふ事です。こんな話を挿話として入れますが、この挿話は大變役に立つと思ひます。高等一年で公正を教へる際の如きローマの正義の女神は目がくしをし、左に衡器を持ち、右に劍を持つてゐる。これは公正の第一義は萬人に對して公平であるといふ事の象徴だと語つて行つたりします。兎に角この挿話は私共の修身教授を活かしてくれる大變よいものだと思ひます。道話法話の名家といふのは要するにこの挿話即ち小さい例話を多く持つてゐる人だと思ひます。參考書は逸話の泉、はなしの庫といふやうな本がよろしうございませう。小原圀芳氏の修身教授の實際も用心して用ひたらいゝでせう。

更にこんな形式があります。即ち大きい例話を語ります。それを語る間に要所要所で訓話を下します。而して其の訓話の例證として小さい例話即ち挿話を入れます。そして一寸訓話をした後、本篇の例話に入り、其の終りに於て結論としての訓話を下すといつた風の形式です。

例話の初め――訓話――挿話――訓話――例話の中程――訓話
例話の終程――結論的訓話

といつた風のものです。錯雜交錯した間から教訓を導き出さうとした形式です。次の心學道話を御讀み下さい。

何事ものりをこえゆく世の人の心にかたき關もりもがな

いにしへは、國々に關をすゑて、まもりの人をつけ、往來の人をあらため、其仔細なきものは、これを通し、仔細あるものは、是をとゞめて都に告る、いはゆる美濃の國には、不破の關、攝津の國には、須磨の關、あるひは逢坂または木幡など是なり。今此歌のこゝろは、人つれに、おそれ敬むの心を存して、私欲をふせぐ事は、猛關をまもりて、旅人を留むるかごとく、其よしあしをしらまほしと也。もがなとは、ねがひのことばなり、然らざれば、私欲常に本心をくらまして、人の道に違ざかること多かるべしと、うち歎きたるさ

まなり、關守のたとへ、甚だ有難いことぢや。

これ即ち明德をあきらかにする手段、日新の工夫でございます。されば銘々どもが、人の道を失ひまするは、只おれが〳〵の身贔屓身勝手よりおこるのでございます。しかもこの身は、父母の緣によつて、生ずるとは申しながら、畢竟天地水火の塊ぢや、佛家では、地水火風のかたまりぢやと申して、是を四大といふ。この四大むすんで、形をなせば、六根を具足いたします。六根とは、眼と耳と鼻と口と身と意と、この六つぢやこれをまた六識ともいふ。此上第七を心識といひ、第八を阿賴耶識とも、又含藏識ともいふ。此第七の心識が、一切の善惡邪正を辨別し、第八識は、一切の理を含んで、しかもする事なく、たゞ何ともなき物なり、已上これを八識といふ、識とはしるといふ事ぢや。さて六識に對するものは、色と聲と香と味と觸るると法と、これを六塵といふ。およそ世界に、あるとあらゆるもの、此六ツの外に、もれるものはござりませぬ、尤此事を委しう申すと、生藥やの店おろしするやうで、すべてチンプンカンプンに成て分らぬ、委しい事は、識者におたづねなされませ、此方に入用はない。只さしあたる所は、孟子に所謂、耳目の官は思はずして物におほはるると仰られて、目はみるか役、耳はきくが役、しかも見れども、何の色としらず、たゞ見るのみ、聞とも何の音としらず只きくのみ、是を分別するものは、意識なり。しかれども、得しわるい方へかたむきやすき意なれば、第七の心にしつかり敬畏るゝ所があれば、人の道がつとまります。さすれば心は大切な關所ぢや、こゝで油斷を致して、うか〳〵すると、どのやうな惡事を、おもひ付うやら、甚だ怖いものぢや、おそれ入たたとへなれども、已に東海道には今切箱根、木曾かい道には、福島横川、すべて諸國の御關所で、明六ツの御太鼓がなると、御門がひらく、此とき御役人さまがたは、一同に御列座あそばされてござる、これが明六ツの太鼓をきいて、お上下をめすのではござりませぬ。夜半でも八ツでも、何時でも嚴重に御番をあそばさるゝによつて、夜中何どき、御用物が通つても、ちよつともおさしつかへござりませぬ、人の心も、眞其ごとく、れても覺ても、立にもぬるにも、長れつゝしむの心が、番してぬれば、燈籠鬢や、三味せん太鼓、鍋やきすつぽんどじやう汁を、めつたに、うか〳〵通しはせぬ。誰しも用心する樣なれども、通つてしまうた、跡での後悔、これがちやうど、明六ツの太鼓を聞て、門をひらくと、旅人は通りかゝる、ヤレ待てくれ、上下を着ねばならぬと、いうてゐる、其隙に、よいものも、わるいものも、通り拔て仕舞ふ樣なものぢや。是ぢやに依て心の番が、きよろつくと、どんな大變が起らうやらしれませぬ。故に、明命をかへりみるとも、申してある、是について、おそろしはなしかござります、所は江戸の神田邊と聞たが、名は何とやら申して、いたつて貧乏なくらし方、夫婦に子供三人、亭主といふは三十四五、女房は二十八九、家は九尺二間のうら店、鼠の巢を見るやうな住居、商

賣は何と取さだめた事もなう、只明てもくれても、一合酒と女夫喧嘩、小博奕が商實同前、あさは朝寢し、夜は夜ふかし、針を藏に積でも、たまらぬ身持ゆゑ、とう〳〵、貧乏の底になつて、せう事なしに青物賣と出かけ、四五百文の錢で親子五人がその日ぐらし、あさ五百文で土物だなで、大根を買て、其日一日、江戸中を、大根々々と泣あるいて、暮がたに七百文ばかりにし、内へ戻ると、米買へ、酒買へ、醤油かへ、油買へ、子供の鼻ぐすり迄、二百文の錢で、あす一日の軍用金、のこつた五百は即ちあすの商賣のもと手、一日やすむと、一日くはずにゐねばならぬ、小ぜわしない身代、其中から無理無體に、雨がふるというては、半日やすんで博奕うち、頭痛がするというては、晝からかへつて女夫げんくわ、親子五人が、くはずにゐる事も、折々あると、きゝましたこんな咄しは、お子たちもよう聞て、お置なさるが宜しい、是はこれちひさいときに、とゝさまや、かゝさまの、おつしやる事を聞なんだ報で、成人して、此やうに罰があたつて、難儀な暮をせねばならぬ、隨分御兩親のおつしやることを、ヨウ聞ねばなりませぬ。さてかの大根うりが、例の通り、一荷の大根を荷ひ、朝早うから賣あるいた所が、どうした、事やら、其日は一把の大根もうれぬ、日ざしをみれば、はや晝すぎ、腹の時計は八ツさかり、財布の中には、まだ一文の錢もたまらず、これはつまらぬ、此大根が、暮がたまでに七百文の錢に化ぬと、忽あすは、釜の中に蜘蛛の巣がはる、どうしたらよからうと、工夫しながら、いつのまにやら、兩國橋をわたり、本庄の屋敷に、大根大根と、うりあるいた。或おやしきの、表長屋のまどの内から、コレ大根やとよぶ、ヤレうれしや。ソコデ大根やが、表御門から、荷なになひこんで、御長屋へまはつて見ると、門から三軒めの高塀のうち、門口には何某と標札がうつてある、荷をもち込でみれば、緣さきの障子をあけ旦那どのが今月代を、そられたとみえて、鏡たてに向うて、自分髪をゆひながら、その大根はいくらぢやといふ、百に三把でござりますといへば、ソレハ高い、二十四文づゝにしておけといはるゝ、賣たさはうりたけれども、現在損のたつ事なれば、ドウゾ三把にお買なされて下されい、今朝から江戸中を泣あるいて、まだ一把も賣ませぬ、どうでも賣つて歸らねばならぬ、大根かけ直は一切申しませぬといふ。かのお侍がかぶりふり、夫でもたかい、まからずば先よしにせう、邪魔ながら持て歸れと云捨て、緣前の障子を、はたとしめられた。大根屋もいろ〳〵というてみても、かのお侍があひてにならぬ、ソコデ仕樣ももうもなく、ハテつまらぬ、モウ日の入には間もなし、何でも四五百の錢をもつて歸らぬと、親子五人があすの命がつながれぬ、なんとしたものであらうと、手を組で思案をしながら、緣前の銅盥に、フツト目がついた。こゝが大事の關所ぢや、心の關所が、ゆだんなく、番してゐたら、銅盥に目はつかぬ筈ぢや、「子のたまはく、君子固に窮す、小人窮すれば、こゝに濫す」と、これは論語衛の靈公の編に、孔子陳蔡のあひだにかこまれ、口中食を斷て、

門人ことゝくやみつかれて、起ことあたはず、子路といふ人、甚これを慍つて孔子に此事を問ていはく、君子もまた窮する事ありやと、此こゝろは、我師天にしたがうて、道をおこなふ、何のゆゑに、かくのごとく困窮するぞと問はれた。そのとき、孔子の御返答には、君子困窮をまもるが、天命にしたがふといふものぢや、こんきうのときにあたつて困窮せまじと、さわぎ廻るは、天命にさかうて誠といふものにはあらず、されば困きうするにあたつて、困窮するは、もとよりしれた事なり。しかるを、小人は困窮のときにのぞんで、無理に困窮せまじともがくゆゑ、終に惡心がおこつて、ブトかなだらひに目がつくやうになる。こゝを指て、小人窮すれば、斯に濫すと、孔子は仰られたのぢや、これは大根賣の事ばかりではない、われ〳〵どもの身のうへにもこれに似た事があるものぢや。親類の無心據ない掛ぞん、或は病難、あるひは貧乏、その時が廻つて來たら、どう思うても遁れられる物ではない。かるがゆゑに中庸に君子そのくらゐに業しておこなふと、有がたい天命の貧乏、ありがたい親類の無心、ありがたい掛ぞん、有がたい病難と思うて、大切に天命を守つてゐると、物にはすべて、來るときと去るときとあるもので、貧乏し通しにするものでもない。おのづから遁れるみちが出來るものぢや、是によい譬がござります。天竺で獵人が、猿をとるには、鞠をまるめて猿のまへに投出しまする。猿ははらたてかのとりもちを、隻手づかみにつかむと、指がついて離れぬ、驚いて左の手で、かのとりもちを取除うとすると、左の手もまたつく、まますあわてゝ、右の足をかけてとらんとすれば、また右の足もつく、いよ〳〵うろたへ左の足でとらうとすれば、是も付く、只一トまるめの鞠のために、四ッの手あし、こと〳〵くついて、はなれず、さながら括り猿のやうになると、獵人が手足の間へ棒を通して、荷うてかへるときゝました。これはこれ身を遁れんとするによつて、括り猿になるのでござります　はじめ右の手でつかんだとき、騒がずと、じつと辛抱してゐると、おのづから手のあたゝまりで、鞠はたれて、自然とあやふきを遁れるに、其辛抱が出來ぬによつて、うろたへ騒いで、いのちをうしなふ、ナント氣のどくなくゝり猿ぢやござりませぬ歟、とかく辛抱が大事ぢや、うろたへまいぞ、うろたへると、銅だらひがほしうなります。ソコデかの大根うりが、緣さきで障子は締てある。あたりに見る人はなし、かの銅だらひを、水の入たまゝで、大根貳三把の下へ、ソットかくす、怖いものぢや、今までひろかつた世界が、立どころに狹うなつて、五尺のからだを、しばらくもおく事ならぬソコデ荷をかつぎ出して、門口を出ようとすると、障子のうちから、コレ大根屋と呼かけられる、ぬからぬ顏で、まかりませぬといふと、イヤ〳〵直はねぎるまい、その大根買ふといひさま、障子をさらりと明られた。大根屋もびつくりしたが、どうぞして逃ていのうとおもひ、何把ほど入まする、はした買は出來ませぬといふ。イヤ〳〵はした

では買はぬ、その大根みな買はふ、此縁さきへならべてくれといはれる、サア大根屋も一生懸命、障子のしまつてあるうちなら、銅だらひの出しやうもあらうに、今さら銅盥が出されもせず、というて賣まいともいはれず、逃てゆかうにも荷を捨て歸つてはならず、千百萬の後悔も今に成ては間に合ず、うろ〳〵としてゐると、かのお侍が、大根屋のかほをきつと見て、われはきつううろたへて居るぞよ、まづ銅盥から出して、大根の數を、かつへて見よといはるゝ。大根屋は總身に冷汗を流して、モウ切られる歟、ぶたれるかと、ワナ〳〵ふるひながら、かのかな盥を恥かしさうにソツト出して、土に手をつき、且那さま眞平御免なされて下されませ、何をかくしませう、先刻も申しまするとほり、今朝からまだ壹文の商もいたしませず、このまゝ歸りまするとあす親子五人が、給まする事が成ませぬかなしい貧のぬすみ根性、めんぼく次第もござりませぬ、七ツをかしらに子どもが三人、どうぞ親子五人が命を、お勘なされて下さりませと、色青ざめて、土にあたまをすり付て、詫言する。かのお侍おもひの外、氣たてのよい人で、さらに立腹のけしきもみえず、イヤイヤ其詫言には及ばぬ、まづ大根の數をよんで見よといはるゝ恐々ながら大根を縁へつみ上たところが、貳十三把、かの御侍、やがて七百六拾四文の錢をとり出し、かの大根うりをよんで、サア其方がいふ通りに、貳十三把七百六拾四文、序にかなだらひをそへて遣す、貧のぬすみとはいひながら、われが根性は、餘ほどよごれてあると見える、此銅だらひは、顏や手あしをあらふ道具なれと、たゞ顏手足をあらふ計では有まい、心のあらひやうもありさうなものぢや、無禮は咎めぬこの銅盥を遣はす、持て歸つてとつくりと思案をし、心の垢をあらひおとせせと、云捨て障子をしめて、うちへはいる。大根屋は夢見たやうに、有がたいやら、恥かしいやら、禮もいはれず、詮方なさに銅盥と錢を荷の中へ入て、早々にかのやしきをにげて出て、はじめて生たやうに覺たが恥かしいと思ふ心が、腹のうちに横たはつて、ウツ〳〵と家に歸る。是から經文に說てある、觀音の御利生、刀刃斷々壞の、功德の段ぢや。常ならば小歌うたひながら門口を遣入と、荷籠を投りてゝ、錢財布を搖げ、庭に立てゐながら、まづ翌日の手くばりぢや、百が米かへ、二十四文が薪をかへ、十六文あぶらかへ、と子どものはなぐすりから、今夜の寢酒のさかなまで、のこる所もなう、でかしがほで、さはいする所なれど、けふは何と思うてやら、いつにない門口をそつとはいり。しを〳〵と上り口にこしをかけて、わらぢのひもをとかうともせず、物をもいはずさし俯てゐる、女房はくしまきあたまに、乳呑子をふところへねぢこみ、埃はらひ持たせたら三寶荒神ともいふべきいきほひ、一調子はり上てうり上の錢を見せず、あやまつたきつねどのゝやうに、俯いてばかり居ねむつてゐるのか、但しはくらひ醉うて戻つたの歟、見たくもない倒博奕と、御託宣を上て見ても、一言も返答せぬ。ソコデ女ばうが、合點かゆ

かず、荷の中をみれば賣上の錢もそのまゝ、外に見なれぬ銅盥があるゆゑ、これはこなたどこから持て歸らつしやつた。ちこの内には不似合なかなだらひ、顏つきといひ銅盥といひ、何ぞわけが有さうな、とたくしかけて問つめる。こゝで亭主も面目なげに、けふの始末をいちぶ始終はなし、さて〳〵、其方が手まへも面目ないと、はじめて妻かさめてきた。これが是ありがたいものぢや、かの御侍が、心を洗へと、御異見の一言大根うりの腹に横たはつたは、孟子のいはゆる、羞惡の心は義の端なりと、仰られたもこれぢや。此はづかしいと思ふは、本心の發見、恥をさへわすれれば、人は身はたつものわるうすると恥をかいても恥かしいともおもはぬ人は、こゝろがよごれさつて、たとへば鏡のくもつて影のうつらぬやうなものぢや、幸に此大根うりは、よいお侍に出あうて、有がたい御異見に預かつたので、本心に立戻られた。これを觀音の御利生さいふ。もし此ときに、銅盥をぬすみおほせたら段々盜みにおもしろみが付て、はじめに恐ろしいとおもうたのが、後には心ようおぼゑる樣になる。古歌に、

鳴子をばおのが羽かぜにおどろきて心とさわぐ村すゞめかな

これはこれ、ぬす人も、はじめには、己が足音におどろけども、後には石で戸をたゝき割て這入るやうになるは、鳴子におどろく村すゞめの、後には鳴子に馴て、とまるやうになると、同じ事ぢやこれを習性と成というて、よい加減に目をさまさぬと、一生すたりものに成まする。この大根うりも、後には大盜人にもなり、首の座に直るやうに成のぢやけれど、かのお侍の御異見の聲が耳に入て、たちもどりが出來て見れば、首きられる氣づかひはない。これを見れば、御侍は觀音さまぢや、則刀刃斷々壞のくどくでござります。洛東清水寺の御寶前にかけたる繪馬を見ますれば、罪人がしばられて首の座に直つて、首をさしのべてゐると、其後に太刀をふり上てゐる、其上の方に、觀音さまのおすがたがあらはれて、光明をはなつてござると、太刀とりの太刀が段々にたれてある所が書てある。どなたも御ぞんじでござりませうが、これが、刀刃斷々壞の功德を書あらはしたもので、みな心の事ぢや、こゝろさへ正しければ、刃向ふつるぎはないものぢや、かるがゆゑに仁者に敵なしとも申てある。されば此大根うりも、これから女夫こゝろを合せ、本心に成て、夜晝はたらき、終に三年目には、相應の八百屋になつて、はじめてかの銅盥を御侍の方へもどし、厚う御禮を申て、この御やしきの御出入になりました。これが舊染の汚をせんたくしたと、申すものでござります。

これを讀みます、と一寸どれが本篇やら、どれが主眼やら分らないやうですが、全體として何とも言へん面白い所があると思ひます。餘り科學的になつた訓話よりも却つて此の方がよい場合もあると思ひま

す。

例話中の小判斷

これについて問題となるのは例話を話してゐる間には訓話を挿んだ方がよいか、挿まん方がよいかといふ問題です。例話の藝術的効果を尊ぶ人はまとまつた全體を描出したい爲に、例話の途中では全然訓話めいた事、即ち知的判斷を下さんといひますが、私は一寸の輕い判斷は差支ないだらうと思ひます。講談師は話の本筋のみを辿らんで一寸横道に這入つたりするやうな處のものです。然し無論系統立つた重い訓話を下すのではありません。例へば尋四志を堅くせよくジェンナーの話をするとしますと、友人に種痘法發明の事をしますと、友人は「止せ止せそんな下らん事出來るものか」と忠告し或人は「おい、馬鹿もいゝ加減にせよ。そんな夢のやうな事に凝つてしまつて本業の醫師の方を投捨てるやうなら、以來絶交だぞ。」と申しますと語つて行つたら、

「こんなにいはれたらジェンナーはどう思つたらうか。」「君等ならどんなであらう。」

位の事なのです。此の時子供に「僕等なら止めます」といはせたいと思つて此の問を出してもいけませんし、さういつた子供を嘲笑したり、英雄的に「屈せずやります。」といつたのを賞めるやうな事はいけない事は勿論です。落膽して中止しようかと思ふのは人らしい所です。人間の本當の聲です。私はこの聲にも同情しつつ而もこの困厄に屈しなかつたジェンナーの意志力の强大を讃美しなければなりません。

一二年の假話は其の筋が單純で量が少ないですから途中の小判斷を下す場合は少いです。然し例へば一年の生き物を苦しめるなの如

き、次郎は或日戸口で凧の尾を修繕してゐると、燕が葉をくはへてばつと飛んで來た。と話して行つた後「あなた方はこれを見るとどんな氣が起りますか。」と問うて行き、戸をしめた事を話して行つては「後によく考へて見ると惡い事なんですが、こんな時には分らなかつたですね」位にして行く事は一向差支がないし、又さうした方が都合がよいと思ひます。

吉田靜致博士　倫理學審議
荻原擴氏　倫理學概論

第三節　義務の目に關する訓話

法律的教授

の教授法

最も古くて最もいけないのは、法律的に具象的な條目を立てて兒童を束縛して行く事です。例へば尋一第九始末をよくせよを授ける事としませう。其の說話要領と注意とを箇條書に並べて見ますと、

一　學校用具、帽子、履物、傘等の始末をよくすべし。
二　物にても置き場所を定め、用を濟せし後は元の所に納むべし。
三　學校用具の出し入れ等の順序方法を定めおくべし。
四　登校の準備は前日に爲し置くべし。
五　帽子、風呂敷、かばん、履物、傘等をとり散らすべからず。

となりませう。用意のない人はこれを殆んど其の儘の形で權威者の如き態度で命令します。

「あなたがたらはね、學校の道具、即ち本とか雜記帳とか鉛筆とかの始末をよくしなければなりませんね。」「始末をよくしてゐますか。」

「さう。では帽子履物の始末もよくせねばなりませんね。」

これで全く子供の面の上をなでて行く訓話です。こんな訓話ですから物の十分も立たん中に摘出した五箇條をみんな話してしまひます。いや、そんな教授の技術の問題ではありません。第一始末よくせよと外の方ばかりをなでた所で、どんなに始末するかといふ詳しい方法には移つてない解ではありませんか。又其の始末に關して兒童は少しも働いて居らんではありませんか。全く教師のいふ所をば受身になつて聞いてゐるだけではありませんか。これでは全く駄目です。骨だけの教授です。所謂教授です。

こんな方法はいけません。ですから私共は如何にして實行するかといふ實行上の用意及び方法を研究せねばなりません。で前の例の始末をよくせよにしても、親切な教師は例へば「學校用具の出し入れ等の順定方法を定めおくこと。」を授けるにしても、本をカバンに入れるにも綴目の方を下にして入れる樣にするとよいし、筆入は蝶番になつてゐる所を下にしてしまふとよいのです。小口の方を下にして入れると端々が折れたりしますし、蝶番の所を上にするとばらりと筆が出たりする事があります。と一々利害を說いてかんでふくめるやうにして指圖し、やがて自分が一生ののでこれを實演して見せ、各自にさあやつて見なさいといつて實行させます。此處が教訓が實行と結附いた所で、即ち作法をやつたのです。勤勞學校の理想といふのも此處を指したのです。一定の計畫を立てて細心な注意に導かれつつ其の計畫を筋肉の上に現はさうとした所に勤勞學校的精神が現はれて來ます。私共は高遠な理論を唱へてはゐますが、其の理論が一向實際に現はれて來ない事をよく見ますが、駄目です。或理想を自分の分際に應じて

實現してこそ理論は理論としての光を放つのです。勤勞學校の精神を現はすのは此處です。

前の教授は抽象的でなく具體的で、法律的でなく其の法律が實行に結附いてゐます。然し殘念な事には其の覺えた事と實行した事には自分が働いたといふ自證がありません。先生がかういはれたといふ意識があるだけです。所がすべての教授がさうであるやうに、修身教授も亦僕がする又僕がしたといふ意識に導かれて進むやうでなければなりません。自學主義の教育です。學習を意志の活動であると見其の意志活動の中心となりてゐる所ははたらきとこれに伴ふ自覺てあると考へ、兒童の活動でも自覺の色合の出たのは「己れが考へた事だ」。己れがした事だ」「己れのすべき事だ」といふ意識の存する事だと考へて行きます。そして兒童の學習にもこの自覺の色合が十分出るやうに導かなければならぬと考へてする教授法は即ち私共の自學主義の教育です。

自學的教授

で例話を話したら今度は兒童自らをして此の場合でいへば、始末すべきものそれを如何にして始末させるかを考へさせ直ぐ實行の出來るものは其の實行を練習させる事にします。孝行でも同樣父母を思つてゐる子はどんなにして其の心を現はすかといふ事を問題として研究して行きますし、工夫せよとなれば足下にある工夫すべきものを探し出して行きます。始末の場合について考へて見ませう。「始末よくして行かなければならぬのは何ですか。」と問うて行きますと兒童は「何々何々何」といつて來ませう。其の時例へば學校の道具即ち本や筆記帳や鉛筆や筆や墨はどうしますかと聞いて行きます。「學校から

歸つたらどうするか。」「勉强が終つたらどうするか。」「整頓するにはどうしたら都合がよいか。」と問題を出して兒童に考へさせ、衆生の答をまとめて一の方案を立てて行きます。そして翌日實行したかどうかを聞いて其の實行を督勵して行きます。

討論式教授

此の方法が徹底して高學年に行きますと、或問題を出して兒童に考へさせ、相互に討論させる仕方をとる事があります。例へば職業について語る事にしますと、「何故に職業に從事しなければならないか。」「職業に貴賤があるか」といふやうな問題を出して兒童に自由に其の考へてゐる所をいはせます。兒童は其の思つてゐる所をいひますと他の兒童が異つた考を持つて居れば、これに向つて反對意見を述べます。他の兒童は又異つた意見を述べたり、又先に發表した所の兒童に向つて質問したり教師に質問したりします。これを私は討論式の教授と申しますが、この形をとるとしたら、其の教順は大體次のやうなものでせう。

一　題目の提出（職業なら職業、勇氣とか同情とかの）

二　研究すべき問題の發見（成るべく兒童が見出す。若し兒童が見出さなかつたら教師が與へる。）

三　考察及び質問（兒童は各自考へて行きます。そして其の間に教師に問ふべき質問例へば惡い職業の事も考へてよいかといふ樣な質問をします。）

四　意見の陳述及び討論。

五　教師のこれ關する斷案の研究及び教師の正しき指導。

といふ位になりませう。

遂ひ一二年前迄は私はこの討論式の教授は兒童をして好辯の徒とするの惧があると考へ、執るべき方法でないと考へたのでした。今は私は兒童から案外其の衷心からの聲の聞かれるのを見、この教授法も或程度迄はとつてもよいと考へるやうになりました。然し先づ教科書について教師は話し、それから兒童は教科書について又は是と離れて得手勝手な問を出したり討論したりするやうな教授法ならば何にもならんと思ひます。職業といふ題目が定まつたら其の題目の性質上どんな事を研究しなければならないかといふ問題は決つて來ます。其の問題を探させる事が第一兒童の論理的陶冶の上から見て必要な事です。斯くして問題が定まつたら自づと意見も出る解です。所で私共の第一に注意しなければならないのは、こんなにして兒童をして何でもよくしやべくつたらそれでよいと、口先ばかりの人にせぬこと

です。好辯の徒と申します。これは孟子に向つて公都子といふ人が「外人皆夫子辯を好むと稱す。敢て問ふ何ぞや。」といつた事から來てゐる辭「吾豈辯を好まんや。已むを得ざるのみ。」といつたですが、其の好辯の徒とはしたくないと思ひます。いふ事問ふ事は本當に其の腹の底からかういつて見よう。これはどうしても分らん聞いて見なければならないと思ふ事を聞くやうにしたいと思ひます。これ故に指導が必要なのです。所が討論教式をのみとつてゐる教室はどうも兒童を好辯の徒にしてゐるやうに思はれてなりません。

第二に意見を述べる人は決つてしまひ、從つて一方に偏するといふ弊害を除きたいと思ひます。來る時間も來る時間もしやべる人は決つてしまふといふことがあります。所が其の偏るしやべる人は聲高にいつて見たり、我執に捉はれ易い人な場合が多くあります、そして話

せん子は却つて外の事を考へてゐるんだが、一寸口に現し得ないとか一寸億却だといふ場合が多うございます。會議でもごらんなさい。聲高に恐ろしげに勢力家らしくまくし立てる人の意見が案外小數意見な場合が多いものです。この偏するのを防ぐには教師は低級な答も嘲笑せん事です。又物言はぬ子にも言ふやうな機會を與へてやる事です。一寸私共の經驗を述べて見ましても本校、附中、附小の教職員などが集りました時でも其の中で牛耳をとつてゐる人が私共輕輩にも話させる機會を作つてくれる同情深い人がありますと、非常に感謝の念が湧きますが、ふんといふやうな顔をして一段下に見下されますと妙なものです、反感さへ湧いて非常に不愉快な思ひをします。私はせめて子供をこんな目には會はせたくないと思ひます。

第三にこれは根本的な問題です。討論式の教授をしようとするならば兒童の持つて來る問題を適當に指導し得る丈の自信と力がなければなりません。この自信がありませんと、又實際にそれだけの倫理的修養がなければ、決して兒童に滿足な解決を與へる事が出來ません、人は何故に職業に就かなければならないかの如き教師は豫め、パウルゼンがいつたやうに、富人が無職業で徒手して暮すといふのは自分が懶惰といふ惡德に陷つてゐるのみでなく、社會に向つて彼は富の掠奪を行つてゐるものであり、種々の惡德を社會に傳播する點に於て浮浪民、賭博常習者等と同じであるといつた事を調査し、更にミカイロヴスキーが其の社會學に於ていつた所の、人は其の天賦に於て優劣があり、富める家貧しき家に生れたとに依つて差異があるが、それは皆生れる時の一寸した偶然である。同月同日同時刻に生れても金殿玉樓の富家に生を享けるものもあれば、棟割長屋に生れて來るものもある。夫

れは皆偶然の事です。所が其の偶然の一切を除いてしまふと其の人の本質とする所が出て來ます。それは人は働き得るといふ事ですといふ勞働人格説を調べて行つて、兒童の議論、突込んで來た質問を導いて行きます。更に職業も經濟的に見た自分の生活上の資源を得る爲にした勞働が定形を得たものといふやうな正確な解釋を頭に入れてやりませんと、えらい脱線を見たりする事があります。斯く十分に腹を作つて穩やかに導く事です。それをこの用意がありませんと、問題に會つたとき當惑したり、或は窮しては危險思想とか何とかいつてをこりつけてしまひます。勿論最後の或所は決定がつかん所がありまです。この自覺から愚禿親鸞が生れて來、一切經を四回も繰返して讀んで法然は愚痴だと告白されてゐます。然しあんまり早く其のわからぬは出すべきではないと思ひます。私は讀者諸君に斷じて申します。

此の用意と準備と力がなければ決して討論式の教授法をとつてはなりません。でないと本當に子供を賊ふ事になります。

想像經驗

自學主義的教授法の第三の形として、兒童を想像經驗の地位に立たせ、こんな場合にはどうするかと問うて行く事があります。第一の形式が問答式で第二が討論式としますと、これは問題式です。然し共に道德的判斷力を教養しようとする點に於ては一でせう、想像經驗と申しますのは、例へば正直の事を扱つたとしますと、誰か友人がカンニングしてゐる所を見つけたらどうするかといふ問題を出して具體的經驗を問題として其處置を話させるのです。所がこの想像經驗の問題といふのが中々其の解決が困難です。このカンニングの如きも教師に告げて其の不正を矯めて貰ふ正義的手段に出てよいか、默すべき

かが大問題です。殊に自分に聞いて來られた時の如きは夫れです。數年前紀平博士はこの問題を扱つて結局十分な解決がつかんといふ所に落着いたと思ひます。それは或高等學校の生徒が友人に試驗中こつそり問はれたのですが、敎へなかつた爲、其の友人は落第して墮落してしまひました。「どうも其の墮落したのは自分の責任らしく思はれてならん」と自責した事からです。紀平博士は最後に其の自責の念があるのがよいのだといつたと思ひます。然しこれは複雜な條件を持つた場合の事です。兒童の如く條件の單純な場合に於ては無論それは惡いと斷じてよい事でせうが、敎師の胸中には此の惱みがなければならんと思ひます。此の惱みがあつて始めて溫味のあるふつくりした解決が與へられます。想像經驗による敎授法は私は中學年向でせうと思ひます。

以上の如き方法がありますが、隱便な途で通じて用ふべきは問答的自學でせう。次は問題法で、討論法は多く用ひん方がよからうと思ひます。程度からいひますと、問答式は低學年から各學年を通じてよく、想像經驗による問題法は中學向、討論式は高學年に於て時々用ひて善い方法だらうと思ひます。然し義務の目による訓話は修身訓話の全部ではありません。又根本でもありません。もつと他に、又もつと根本的な方法があります。それは內心に入つた訓話です。

第四節　德的訓話の敎授法

義務の目に關する訓話、即ち道的訓話は要するに道德の律法に關する訓話ですが、私共は更にこの義務を行ひ得る力のある事を自分の心の中に認めなければなりません。即ちこの道の根源となる心を自分

の心中に求めなければならないのです。德的訓話は實に此の意味で重大なものであるのです。然らば其の力は何となつてあるかと申しますと私は夫れは情意の間、殊に感情としてあると考へます。例へば父母に對する敬愛の情、他人の不幸に對する同情、身體的欲望を克服して行かうとする勇氣、自分の行爲をふりかへつて見る反省他に及ばざるを思つての奮勵の如きが夫れです。斯る情が存する事は別に教師は教へ込まなくとも、兒童自身が其の內界を振返り見る時自然に發見する事が出來ます。此の點が修身が他の教料と其の成立の根本に於て異つてゐる所です。他の教科例へば理科の如きは自然物乃至自然現象を直觀して「こんな事が分つた。」「面白い」とやつて行く教科です。其の直觀と直觀した結果を系統立てて行くのを兒童自身の力でやつて行かせるやうにし、教師は其の相談相手となるのが理科教授の自學です。國語教授について見ますと、或物語を讀んで「あゝ面白い。」「然し文字や語句も研究しなければならない。」とやつて行くのが其の任務です。而して兒童の分相應に想像したり、思索したりして行かせ、教師は可成干涉しないで正しくやつて行くやう導き、文字や語句の研究も可成自分でやつて行くやうにするのが讀み方教授の自學です。外の對象例へば自然物自然現象文字を以て書いた文章と自分との關係の中、外の對象の方を主にやつて行くが他の教科です。

所が修身はこれと大分趣が異ひます。外と自分との關係の中で自分を發見しようとするものです。外的律法即ち左側を通れ、父母の命を守れ、嘘いふなといふやうな義務の目を立てたものとしての自分を其の研究の對象とするものです。所が其の自分自身を研究する學問は哲學です。或は哲學の中心をなす倫理學です。コーエンは其の純

粹意志の倫理學といふ書物で、倫理學は人間その物を研究する者であるから、哲學の中心である。古代に於て之を示したものはソクラテスであるといつてゐますが、同じ趣意の事ですし、西博士が道德の事哲學の事は退歩的であつて自分の心内に反る事だと說かれてあるのも同じ趣旨です。然るに修身科に於て各人に德と行ふ能力がある事を求めようとするのは實に其の自分を求めるのです。故に哲學的努力です。修身が此處に觸れますと、小學校に於ける哲學的敎科となる解です。故に義務の目を唯獨斷的に授けようとするのは誤です。又これが神が與へたと考へるのも誤です。紀平博士は「行の哲學」といふ本で昔ナイル河畔のサイスといふ都市では太陽神の母をナイースといふ神として祀つてゐました。然し其の神像は永久に秘せられたのです。然るにギリシヤ人もこの神はアテーナ神として祀つたのですが、藝術的天分の豐かな彼の民族はこの神像を秘する事なく、人間の力の最高度を現はした十二の神像としたのでした。これは明らかに神を「我」なりにしたものだと述べてゐます。修身科が研究の對象とす。所も亦此の我なのです。

行ふ或物の發見を指導する敎法

然しこんな事をいつたつてそれは未だ高い程度の理論です。未だ實際に取扱つて見てどうといふ事には至りません。故に私は孝行を例に取つて申しませう。尋常一年の敎科書は孝を說く事頗る其の詳細を極めてゐます。先づ第十一は親の恩です。これは毎日至らぬ隈なく受けてゐる父母の恩は恰も私共が太陽の恩を忘れてゐる如くに氣がつかんでゐるものですが、何か變つた事のある場合、例へば一生涯の中に一時期を劃する入學、病氣等の時にしみじみと分るものです。

其の事實を捉へて假話を作つて親の恩の有難さを覺らせやうとしたものです。よく孝は恩で說いてはいけんと申しますが、夫れ誤です。恩だけで說いてはならんのです。恩を全然說いてはならんといふのではありません。無論孝は恩を說かなければなりません。私共は恩を思ふ事によつて父母に對する反感を和げる事が出來ます。フエルスターはこれを次のやうにいつてゐます。

お母さんがみ〳〵小言をいひなさると、「本當にやかましいお母さんだらう。然しお母さんが子供の養育の爲にどんなに難儀されたかを考へて見なさい。種々とむづかる爲徹夜した事は幾夜あつたでせう。絶え間ない乳のせがみに十分な睡眠をとるを得なかつた事がなかつたでせうか。更に病氣に罹つたのを見ては幾夜の看護に身のやつれるのを何とも思はれる事がなかつたでせうか。それは君一人でありません。五人兄弟あれば其の一人一人が甲乙なく厄介をかけてゐるのです。お母さんの今の神經過敏は其の時の負債です。その過勞が積り積つて神經過敏となり、僅かの事にも腹が立つやうになつたのです。

恩を考へる時こんなにも考へられます。然しこれはまだ外の事です。恩から出發した孝は、未だ恩を受けたから孝を盡さなければならんといふ負債に對する辨濟といふ關係です。重ねて申します。子としては何人も父母の恩を感ずべきものです。然し恩から入る途は尙懷疑の人の詭辯を入れます。「私は親から何も恩を受けて居らん。」殘虐と虐待をこそ受けて居るが、何等の恩惠も受けて居らん。」といふ人があります。而して人は多くは一度はこんな考を持つ事があります。或は特別の境遇にある人、例へば父母が墮胎を圖つたかとかいふやうの

人は衷心からこの疑を持つて煩悶してゐます。この特別の事情があつたので煩悶する人は誠に尊いものです。同情しなければなりません。然しこの種の人でも尙其の恨めしく思ふ所に敬愛すべき人を敬愛する事が出來ないといふ所からの煩悶を見ます。敬愛する事が出來ません。然し其の恨めしい、復讐もしたいと思ふ情念の奥に、然も其の奥に恨めしい心にさからつて小さいが而も强い聲で「オイ君、もつと深い親子の情があるぞ」といふ人間自然の情があります。其の爲に斯る人は葛藤に苦しんでゐるのです。だから父母に孝といふのは人間心の深い深い所から出た切らうとしても斷たうとしても切る事も出來なければ、斷つ事も出來ない自然の至情から出たものです。高等小學修身書が自然の至情、人情の自然といつたのはこれです。若し諸君がこれを深く研究なさらうとするならば、西博士の「普遍への復歸の報謝の生活」といふ本の中にある「感謝の無限」といふ章を御覽下さい。

此の趣旨を現はしたのは尋常小學修身書卷一の「親を大切にせよ」の一課です。子猿共は獵師に殺された親猿を曖ためました。何故でせうか。それは全く親に對する已むに已まれぬ情からです。お母さんが鐵砲を打たれて死んだ。「さあ困つた。何とかせねばならない。」と言ふ自然の至情からです。其の外何もありません。故に子供にも子猿共は親猿が死んだのを見てどう思つたであらうかと一言聞いて會心の答を得たら、それで何も訓話しなくてもよい位です。唯諸子もお父さんやお母さんが病氣に罹られたらどう思ふかと聞いて、其の時の心を尋ねたらよろしいのです。決して其の外親を大切にしなさいといふ樣な形式張つた訓話はしない方がよいと思ひます。

自然の至情

此の自然の至情を發見させようとするにはどうしたらよいでせうか。私はこれは少くとも五年以上の問題でせうと思ひます。所で父母に對する敬愛の情を各自が發見するといふやうな事は誠に困難な事です。かまへて教師は人には父母を敬愛する情があるなどと所謂教へ込んだつて駄目です。こつちから押附けたつて承知するものではありません。兒童自身が否教師も共にしんみりと考へて共に自分の心を發見するやうにするのです。

私は大體に於てショーペンハウエルに導かれつつ、こんなに導いて見たのでした。即ち諸君はお父さんに向ふとどんな感じがするかと問うて見たのです。すると「少しこわいやうな氣がします。」といひます。此處から足場を得たのです。「ではどんな恐しさか考へて見ようの恐しさと比べてごらん。」といつて暫君等が考へる事の出來る種々く考へる時間を置きやがて種々と恐しいものを出して比較して行きました。暗黑盜賊、風水害毒蛇あらゆる恐しさはそれでありません。此處に於て何故かと考へて行きました。盜賊、風水害、毒蛇それは全く自身の生命が危いものです。暗黑も亦どんな事が起るかも知れませんから、其の害か恐しいのです。所が父には決して左樣の事がないのです。すると恐しいのではない事になるのですが、子供は薄恐しいと申します。で私は感じの比較を始めて行つたのです。狹い廣島です、が、近郊に東練兵場といふかなり廣い原があります。あの原を一人行つたらどうかと問うて見たのです。矢張うす。恐しいのです。それは何故でせうか。大きい場所の中に小さい自分が立つてゐるのです。そこからして一種の感じが起つて來るのです、斯くして美學などでいつてゐる崇高の感をば言葉で言はずに、もつと低い程度の崇高から高

い程度の所まで氣分を味はへて行きました。低い程度のは物産陳列館といふ廣島市では先づ第一の西洋建物の半面に夕日がさした有樣です。高い程度としてはカントが擧げました晴れた日の夜滿天に燦と光つてゐる星辰を仰いだ時の感です。其の漸次に純粹になつて行つたのは即ち純粹な尊敬で神を思つた時の感情です。私は諸君及び私が持つてゐる父母に對する感情は實に是に似た感情であると纏めて行きました。そしてこれを敬といふ感情と名を與へたのです。

次には骨肉の愛といふ事です。それには私は少し極端ですが、諸子が若し父からひどく叱られて腹が立つた時、更に外に出てよその人が自分の父に惡口をいつたらどう思ふかと聞いて行きました。矢張り腹が立ちます といひます。又其の惡口いふ人が平常自分を大變可愛がつてくれる人でも尙自分の父母を惡口されては腹が立ちます。何故でせうか。それは父母は自分にとつて最も親しい方だからなのです。私は父母の愛情をば親しい方として行つたのです。この人が本具してゐる自然の至情が孝といふ德を生んだのです。而してこの自然の至情は各自が胸に手を當ててつく〴〵と考へる情自然に分つて來るものです。押附けたり敎へたりするものではありません。兒童と共に發見して行くものです。私は修身敎授の自學といふのはこの本具の心を發見するやうに導く事であると思ひ、其の學習の對象は實に自分の本心であると考へてゐます。

同情勇氣の如き全くこの種の發見なしには進めて行つてはなりません。人を可愛がつてやらなければなりません。難義してゐる人を見たら助けなければなりません。と外の方から迫めて行つたつて決して成程といふ感が湧きません。私は友人の失敗を見る時、夫が輕微な

場合は可愛相だとは思ひません。却つて「いゝ氣味した」といふ惡意的歡喜を起します。同時にやがて夜半になれば起つて歩くんだと思ひつつも、街頭に哀れを乞ふにせ片輪の乞丐が可憐です。故に私はよく考へた同情を以て自分の行動を淨めて行かなければなりません。友人が先生に叱られます。一寸はいゝ氣味と思ひます。然しよく考へて見なさい。實際かはいさうなのです。これを可憐と感ずるのが眞の同情です。私共は當下に自分の心内にある同情心を直觀して行きたいと思ひます。

第五節　行爲の經路を直觀する訓話

人が其の道德的經驗を振返つて考へて見ます時、何人もが考へる事は道德的行爲には否定の伴ふ事でせう。即ちこらへるといふ事が伴つて來る事でせう。而してこのこらへるといふ事には第一の義務的訓話に說きましたやうに、外からあしてはならない。かうしてはならぬと刑罰や社會の輿論やなんかでこらへさせる事がありますが、もう一つ内から自分であゝしてはならぬかうしてはならぬといふ場合があります。これは苟くも道德の事を考へる人の何人もが經驗する事で、道德の全部ではありませんが、重要部である事は古來何人もさう考へたものです。

一寸兒童にもあり、私共にもある經驗を申しませう。學校の長い廊下を通る時よく走りたがります。又授業が終つてしまふとよく走りたがります。然し其の時走るのは他人と突當る危險があるし、他の教室で授業をしてゐる時ですと其の妨害になります。が持つて生れた走りたい本能はすぐとんとんと驅り出しますが、何かの時「走つて

はならぬ」といふ感じが起ります。道德的良心から起つた當爲の感であります。前の場合は多く放心の狀態で、走りたいといふ本能に驅られて當爲の命令も何も忘れてしまつたのですが、教養のある子は面白いもので始めの中は先生がいつたからといふ外的な强迫から走りませんがやがて自分の內なる內部の良心の聲が當爲の命令となつて響いて來ます。「驅つちやならない。」といふ當爲の感が湧出で驅らんやうになります。この道筋をヴントは外的な强迫から內的な强迫に向ふのだといつてゐますが、全面をうがつた見方だと思ひます。

驅つちやならないと思つて驅らなかつたらどうなりませうか。自分が一段高く向上して來ます。つまり今の瞭時の前のよりももつと善い人格を自分の力で創造したのです。驅りたいと思つたのは何でせうか。自分の生得の本能です。即ちこれを哲學的な名でいひますと自分の內部の自然です。其の時驅つちやならんと出て來るのは道德的良心の命です。換言しますと理性の命であります。然らば其の理性の命を聞いた時自分はどうなりますかといひますと自然と理性とを總合した一段高い人格に向上したものなのです。よく理性の命に從つて驅らなかつたらば本能をなくしたのではないが、亡してしまひ克服してしまつたではないかといひますか。驅りたいといふ本能は依然として亡びないであります。それと同時に理性の命も健全にあります。そしてこの二つが抱き合つたも一つ高い境地に向上したのです。この總合的向上は幾ら進んでもこれで十分といふ事はありません。この世から息を引取るまで永久に續いて行く向上の一路です。これを人は向上といふ無限の課題の前に立つてゐるのだと申します。同樣に無限に弱くなつて行く道もあります。良心の命令があ

ります。けれども騙つたとしませう。其の人は本能の力は壓迫されてしまつたのです。かういふ人は心の弱い人です。而して良心はこの行の後に「あんな事をしたのは惡かつた。」と審判的な判定を與へて戒めます然しこれが度重つてごらんなさい。最早惡い事をしても耻しいとさへも思ひません。日に增し心の弱い方へ落ちてしまつたのです。良心と本能とが分離して本能の方にのみ捉はれ、もつと大きい總合の方へ向ふ事が出來なくなつてしまつたのです。

「法を重んぜよ。」といふ材料は大切な教材です。然しこれも外から法を守りなさいと教込んだでは駄目です。法を守つた場合背いた場合の心の狀態を反省して其處からこの義務意識は何人にもあるが兎もすると忘れたり、又はこれに背いたりする。故に放心せんやう、理性の命に背かんやうにしなさいと心の方から戒めを與へてやる行方をとりたいと思ひます。實際此の當爲の意識が即ち法の依つて立つ根據でありませう。

然しこの前の例は良心と本能との總合のごくごく輕い場合です。本能の强い私共はもつともつと大きい事件に會ひます。其の一つは子供にも大人にも食慾で、大人には恐らく色慾でせう。この前に立つ時私共は其のあまりに無力な事を痛感せずには居られません。

で、矢張り私共は食物に氣を附けよと教へる際でも、この心の强くなり行く過程と弱くなり行く過程とを子供と共に反省して行きたいと思ひます。唯食べ物に氣を附けなさい。でないと病氣に罹ると教へて行く事と共に、菓子が食べたい、水が飲みたいといふ時に現はれる「食べちやいけんがなー」といふ理性の命を考へて行きたいと思ひます。そして其の無力さを考へて行くと同時に、人間の修養は漸次に理性の

命令に聽從して、もつと強い心の自己を創造し行くべき事を話して行きたいと思ひます。

食物に關する克己は常に行はれる事ですが、めつたに現はれんで而もこの義務意識が深酷に現はれる場合があります。それは正直に關する行動の場合です。私共はよくこの德に關係した場合に立つた時に、よく惡魔の聲に聽從したがります。それは子供の場合では他人の叱責からであり、大人の場合では利益からです。而して此の場合程良心の聲と本能の誘惑が峻烈に現はれる事はありません。お使ひに出ました、其の歸り釣錢を落してしまひました。歸つてはつと氣のついた場合、私共はよく子供が其の面にこの二元の葛闘になやまされる苦闘を見ます。「いはうか叱られる。」「いふまいか」の二つの途に立つてのなやみです。而して多くの場合このなやみを押切つて「此のものは高かつたんです」とか母が氣が附かんのに乘じて默つて誤魔化さうとします。物をこわした場合、父母の留守に菓子を失敬したりする場合と中流下流所の生活にはざらにある事です。然し良心の聲は有難いものです。一時かくしますが、隱せば隱す程後に顯はれはしまいかといふ懸念が強くなつて來ます。私共は矢張り此處を扱つて行きたいと思ひます。

所で斯の種の德を取扱つて行く事になりますと、よく子供に自分のした事を告白させたり懺悔させたりしてそれに足場を据えて扱つて行く教法をとる人がありますが、これは私は少し躊躇したいと思ひます。私は子供に存する暗い影を大勢の前で告白して恥を明みへ出す事は人として大切な羞耻を失はせる事になりはしまいかと思ひます。で私は斯る事の例話兒童の生活にある)は自分で準備して行く事にし

てゐますが、或は子供が見た事をいはせる事にします。川に水泳に行くなといはれたのをこつそりぬけ出で、やつて來て、ごまかさうとしますが、鼻の先の白くなつたのがごまかしを承知しないと言ふやうに例話を作りますが、同時に子供にも其の見た事を話させて行く事にします。兎に角「正直にせよ」と外の方から權威を以つて勸める事はしませんで「君等が誰も見て居らん時窓硝子をこはしたとか茶碗をこはしたとか、垣を破つたとかするそんな事があつた時、どんな心になるか」といふ問から出發して行つて、其の時潔く良心の命令に從つて告白するとそれは自分が心の强い人となつた事だと行爲の經路を明かにして行きたいと思ひます。

斯の如く、一つの行爲について心の動き方の方から詳細に考へて行きますと、中々多くの義務の目に亘つてゐゝせよ、かうするなと澤山やる事が出來ません。一時間の中にせい〳〵三つか四つでせう。そして其の時予供があちらこちらに分れてがや〳〵言つたんでは到底しんみりと考へて行かうしても行き樣がないと思ひます。こんな問題を考へる時はしんみりとした空氣の中で互に眞面目に眞劍に考へて行くやうにしたいと思ひます。然らばこの樣な取扱をするのは何年頃からかといひますと比較的早く始めて三年か四年頃からが丁度よからうと思ひます。教法としては困難ですが、やつて行つて第一教師の心が淨く美しくなると思ひます。

烏本愛之助氏　道德的經驗と倫理學說（哲學雜誌論文）
中島德藏氏　ヴントの倫理學　丙午出版社
西　博　士　道德教育に關する諸論文
小原國芳氏　修身教授革新論　集成社

第六節　理想

何といつても訓話は修身教授の本體であります。私共は斯く孝友和正直親切博愛といふやうな德について話して行つたならば、其の一一の德を修めんとするの心を起すのみならず、全體として或種の理想を畫きこれに向つて精進しようとする考を起させたいものだと思ひます。然らば其の理想とする所にはどんなものがあるかと申します。と僕は大きくなつたら大將にならう、大臣にならう、大きな實業家にならうといふやうに、大臣、大將、實業家、大學者、大美術家、といふやうな理想が第一にあります。これも一種の理想には相違ありませんか、私は事功的理想といはうと思ひます。これは遠い將來の事ですが、近い所では今年は一番にならう。もつと勉强して席順を進めよう。テニスの

選手にならうといふやうな理想も兒童の常に描いてゐる所です。これをば接近的理想と申しませう更に理想的人物といふのがあります。豐臣秀吉のやうな人にならう。ナポレオンを理想としようとするのがこれです。

斯の稱の理想及び理想的人物は誰でも持つてゐるものです。而して事功的理想、接近的理想共に人をしてよく努力させます。私共は例へば學界に一旗幟を飜さうとして努力します。何縣何町第一の富豪とならうと努力しては、將來の爲に現在の欲望を節します。此の間の新聞に大阪で一つの工場主とならうといふ事を理想として、田舍から出て來た人が或工場で動いて人の分の夜業までも受負うて働き、數千圓の貯蓄が出來其の娘は女學校へかよはせる。殊に二女の如きは五百圓の束脩が入る學校へ入れますが、自分等家族一同は小さな木賃宿

のよごれた疊の中でつゝましやかに暮してゐるといふ話を見ました。胸の中に燃えてゐる理想がさうしたのです。奮鬪努力は全く燃え立つ理想によつてのみなされるものです。外國を崇拜し、あの國のやうにならうといふ事を理想として來た日本は、外國に近づき彼の國の短所と缺點とを知ると共に、俄然として幻滅に會つてしまひました。理想を失つてしまつたのです。御覽なさい。今日の日本には理想を失つた事から來る倦怠停頓、固體化の如き現象が數々行はれてゐますから。大人物が出てもつと高所に立つて國民の向ふべき理想を示さなければなりません。

然し事功的理想接近的理想は人に努力を促しはしますが、其の理想は何人も實現し得るものではありません。大臣の數にも大將の數も制限があります。澤山出來る醫學博士でさへも矢張り其の數に限りがあります。ですから其の理想に到達し得ない人も考へなければなりません。棒程願つて針程叶ふと申しますが、大臣を志してなり得ず、縣下第一の大富豪を志してなり得なかつた時にはどうなりますか。低きに安んじる人があります。この人は蘇志弱行の人です。然らずんば不平を起します。大臣病患者の醜い政權爭奪戰を考へて御覽なさい。一小學校長、一教育會長の椅子が欲しいとて互に排擠し合ふ教育界を見なさい。いや一寸校長に氣に入らうとか、或人の勢力を殺かうとかして後に廻つて叩く人心の淺ましさを考へてごらんなさい。

事功的理想が齎す暗い半面です。

事功的理想はかういふ暗い半面を持つてゐるばかりでなく、其の理想に制達すると安んずる傾向があります。所が安んじる卽ち現狀維持は卽ち退歩の時です。醫學博士に一ぺんなつてしまふと後は勉强

しない。果ては其の論文の學説が他人によつてひつくらかへされてしまたりします。でも矢張博士です、患者が來て發明した藥が賣れさへすればそれでよいといふ事になります。更にかういふ理想は道德的によい理想でもあり得ますし、惡い理想でもあり得ます。靴の底をボール紙で作つたり、罐詰の中へ石を入れたりしても大富豪となつたらよいといふ事になります。砂利を食つたり砂糖を食つたり、株を喰つたりしても金を集めて政權を維持しようといふ理想もあります。滔々たる世間餘りにこの事功的理想が强すぎます。それでうるさくなります、この醜い目をまざ〳〵見せつけられるものですから、世をうるさしと觀じて、世の煩累から出來るだけ遠ざからうとする高踏的態度、逃避的態度が生れて來ます。現代は斯る人を强ち批難し得ないと思ひます。

斯の如くですから、世の濁りを知らぬ兒童には、餘程この事功的理想に走る事を警戒し、やがて何人も到達し得る他の理想、永久に追うてゐて安んぜざる他の理想を與へたいと思ひます。斯る理想を與へる事こそ修身科のつとめです。而してそれは道德的理想です。新しい意味の理想です。

私の理解してゐただけでは、新しい意味の理想主義といふのは人間の奥底から出る規範意識を汚さん事だと思ひます。即ち私共が絶對に他からは派出しないものだと考へる眞、善、美の三つの價値があり、それに應じて知的の世界に向つた場合にはこれは斯の如く考へねばならぬといふ知の規範がありますし、行の世界には斯く行動せねばならぬものだといふ行の規範があります。同樣に直觀の世界で私共が物を靜觀する際にも、お金になるとか、金の使ひ方に技巧が加はつてゐる

とか、あの人が書いたからと思ふとかと考へる以上に唯もう一心になつて見つめねばならぬといふ直觀の規範があります。この規範を自分が「かうせねばならぬ」と考へた時これを規範意識と申します。そして自分の中に規範意識を感ずる心を良心といひます。故に良心は眞に向つた時には眞の規範を意識する眞的良心となります。二に二を加へれば四とならねばならぬ、他に考へる事は不能であると考へる時これは眞的良心の滿足の下に行動したのです。萬物はプロトンの一元論に歸する。あらゆる物質は水素原子の核の存する陽電子量一の整數であるから、萬物は一つのプロトンから構成されてゐるものであるといふ物理學の學說があります。これも何回も何回もの實驗の結果、事實についてどうしてもかう考へねばならぬと考へて來るのは眞の規範を意識した眞的良心です。この良心を汚さんやうに行動して行くのが理想です。

善の世界について考へて見ませう。私共の行即ち意志の世界は欲望と其の滿足の連鎖です。欲しくなつたから探して食ふ。飽いたから眠るといふのは禽獸の生活です。若し醉生夢死といふ事を本當に考へたらこんなものでせう。所がそれが人間となりますと、これは私のものあれは人の物といふ人格性が現はれて來ます。青々とした麥の生えてゐる土地は麥が生えてゐるといふ事は天然自然の者ですが、これは何の某の所有といふ事に定つてゐます。又免るべからざる天然の性質として自分の父母他人の父母と決つて來、他の動物に比べて人間同志これも免るべからざる根本として或民族が立てた或國民といふ差別が出て來ます。そこから父母は尊い御方である。其の命が守らなければならんといふ規範が出て來ますし、それが個人の胸の中

には孝行をせねばならんと思ふやな良心が起りますし、自分の生れた國には盡さなければならんといふ心が起ります。この良心を恥しめないやうにして行かうとするのが私共の理想です。

美の領域でも同じ事です。色と形を備へた植物や動物を見ます。私共は注意を集めてこれを視つめる。即ち純粹に視る時、其の人の活き活きして發展して行く所と完全に一致してしまひます、其の時其の見た生活を畫布に現はさうとするのが畫家の仕事です。複雜な人事の中に立つて、戀したり悲しんだり喜んだり嫉妬したりする有樣を視つめた時、本當にみつめると、感覺的な慾望とか喜怒哀樂の境を超越して本當に世界其の物と一致して來ます。それを文として表現しようとするのは眞の小說家の作で、藝術は實にこの純なる感情の動きを表現すべしといふ良心の働いた時でそれは眞の美的活動な解です。繪を見る、小說を讀むといふのも同樣で一時的な感覺的の欲望をそゝられやうとか何とかいふ事でなく藝術家が開いて呉れた世界の中に入り込まねばならないのであります。之を觀法三昧とか或は直觀とか申します。斯る態度に出なければならんとは創作的態度にも觀美的態度にも共通な規範で之を意識するのが即ち美的良心であります。

斯く考へて來ますと、其の知でいつて見たら萬物はプロトンの一元だと考へる其の働き、即ちどうしてもかう考へなければならないと考へる當爲は實驗した磁場とか電場とかX線とか水素とかの事實とこれをつかんで行く經驗其の物に中にあるものでありません。却つて斯る經驗を構成する經驗に先立つた或物です。それが動いて經驗を整理して萬物はプロトンの一元だと考へるのです。故に其の働く或は經驗以前の働きです。これを先驗と申します。そして此の働きが